



Title	GLOCOL 年報 2007
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



年 報
2007

大阪大学グローバルコラボレーションセンター

GLOBAL COLLABORATION CENTER

OSAKA UNIVERSITY

目次

	<i>page</i>
はじめに-----	i
I. 組織の概要 -----	1
1. 沿革-----	1
1) 設立の経緯と目的-----	1
2) 背景-----	2
3) センター名について-----	2
4) センター開所記念式典-----	2
2. 運営体制-----	3
1) 運営組織-----	3
2) 研究部門紹介-----	5
3) オフィス-----	6
3. 学内の協力体制-----	6
4. 連携のハブとしての GLOCOL-----	7
5. スタッフ紹介-----	7
6. 運営経費-----	11
II. 研究活動 -----	12
[研究推進部門]-----	12
1. セミナー / 国際会議の実施-----	12
1) GLOCOL セミナー-----	12
2) 国際会議-----	28
2. 「人間の安全保障」プログラム-----	33
1) 人間の安全保障コンソーシアムへの参加-----	33
2) 文理融合研究ワーキング /	
文系研究戦略ワーキングにおける「人間の安全保障」-----	33
3) 図書の購入-----	34
3. 国際連携-----	35
1) 外国人招へい研究者-----	35
2) 国際会議、セミナーの開催-----	35
3) GLOCOL バンコク事務所-----	35
4) JICA との連携事業-----	35
[教育開発部門]-----	36
4. 教育プログラムの開発-----	36
1) GLOCOL における教育事業の位置づけ-----	36
2) 2007 年度の準備状況-----	36

[実践支援部門]	37
5. 2007年度 JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ ディベロップメント」セミナー	38
1) 研修の背景	38
2) 研修の概要	38
3) 研修内容	39
4) 成果	41
6. 青年海外協力隊特別募集説明会の実施	43
7. JICA 大阪夏期インターンシップ実習事業	44
[プロセス評価室]	44
8. プロセス評価室の設置	44
1) 評価セミナーの実施	44
2) GLOCOL 内部のワークショップ実施	45
3) JICA 研修：エンパワメント評価	46
9. スタッフの研究活動	47
1) スタッフ研究会	47
2) スタッフ個人研究	49
III. 学外との連携事業	78
1. バンコク GLOCOL デスクの紹介	78
2. 委託研究調査、委員会活動、社会貢献など	79
3. 他機関との連携	80
1) 人間の安全保障教育研究コンソーシアムへの参加	80
2) 地域研究コンソーシアムへ幹事組織として参加	81
3) シンポジウム・セミナーなどの開催	82
IV. 出版物、情報発信	88
1. リーフレット	88
2. Website	88
活動記録	90

はじめに

グローバルコラボレーションセンター・センター長
栗本英世

大阪大学グローバルコラボレーションセンター（以下 GLOCOL<グローコル>という）は、国際化とグローバル化という大状況に対応した教育改革を推進するため、文部科学省の特別教育研究経費の交付を受けて、2007年4月に設立されました。大阪大学と大阪外国語大学との統合は、同年10月に実現しましたが、世界25の言語の教育研究を行う外国語学部をもつ唯一の総合大学となった新大阪大学の人的資源を有効に活用することは、GLOCOLのミッションのひとつです。グローバル化のなかで現代世界は、政治、経済、社会、文化のあらゆる面でめまぐるしく変化しています。貧困、紛争、環境、感染症などの問題が地球規模で深刻化する一方、日本では「足もとの国際化」が急速に進んでいます。このような状況のなか、今日の大学は、グローバル化した世界の現実について深く理解し、多様な他者との意思疎通の能力——*intercultural communicability*、つまり大阪大学の教育目標の一つである「国際性」——を備え、主体的に課題に取り組むことができる有用な人材を養成する責任を負っているのではないのでしょうか。GLOCOLの目的は、こうした人材を養成する教育プログラムを開発し、実施することにあります。

設立当初は、小泉潤二センター長のもと、特任教員4名、事務職員4名の小世帯として、中之島センターを本拠として出発しました。その後、専任、学内派遣および特任の教員と特任研究員を補充しつつ、学内各部局の41名の教員に兼任を委嘱しました。8月末、小泉センター長の理事・副学長就任にともない、栗本英世（人間科学研究科教授）がセンター長に任命されました。9月には、センター長室と事務局を、吹田キャンパスのウエストフロントに移転し、10月以降は、大阪外国語大学との統合にともないあらたに設けられた本部事務局国際部の国際連携課がGLOCOLの事務を担当することになりました。このように初年度は、組織的な基盤を固めながら、学内外の連携の構築に務めました。

GLOCOLの使命は教育改革にあります。先端的な教育プログラムの開発は、優れた研究に支えられてはじめて可能になるものです。したがって、GLOCOLは単なる教育センターではなく、「人間の安全保障」と「多文化共生」を2つの主要テーマとする研究センターでもあります。また、教育と研究が、あるいは学生と教員が、よりよい世界を創造するための実践とのかかわりを求めることを重視しています。教育・研究・実践が、GLOCOLの3つの不可分の柱となっているのは、そのためです。

初年度にあたる2007年度には、高度副プログラムの開発に着手するとともに、数多くのセミナーやワークショップを開催し、研究の進展と、ネットワークの構築を図りました。最大の事業は、2008年3月に開催した国際会議「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障」（グローバルCOEプロ

グラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」との共催)で、国内外から第一線の研究者 32 名が報告し、3 日間にわたって研究発表と討論を行いました。また、2007 年 2 月に調印された大阪大学と JICA (国際協力機構)との連携協力協定にもとづき、GLOCOL は、JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」を企画・実施しました。この研修には、アジア 8 カ国から 11 名の公務員や NGO 職員が参加しましたが、研究・教育・実践および国際協力の連携のあらたなモデルが構築できたと考えています。

この年報は、GLOCOL 初年度の活動記録をまとめたものです。GLOCOL は、大阪大学内における国際連携のハブとなるばかりではなく、国内外の大学・研究機関、国際機関、地方自治体、市民社会などとの幅広いネットワーク構築を目指しております。ローカル、ナショナルおよびグローバルなレベルで、様々なアクターとの連携 (コラボレーション) を確立し、教育の改革、研究の推進、そして実践との意味あるかかわりを実現していきたいと考えています。まだ生まれたばかりのセンターですが、世界と地域社会に開かれた 21 世紀の大学にふさわしいセンターになるために、今後一層努力いたしたいと存じます。みなさまのご協力・ご支援をお願い申し上げます。

I. 組織の概要

1. 沿革

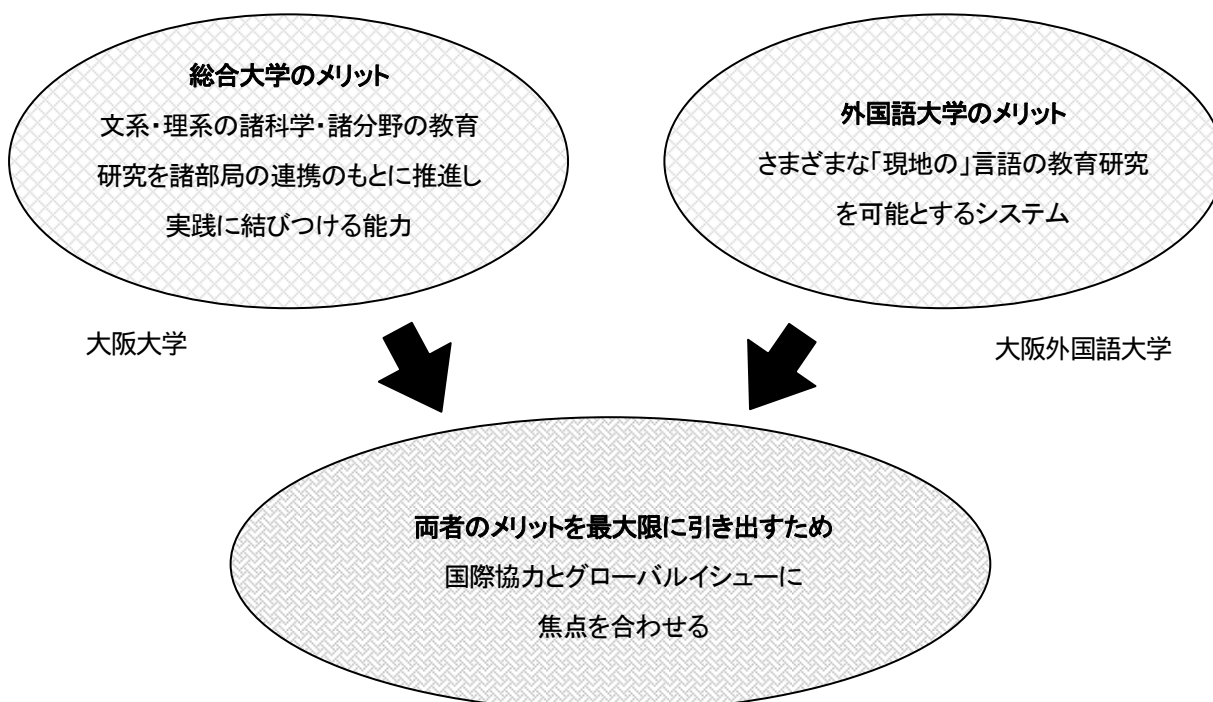
1) 設立の経緯と目的

大阪大学グローバルコラボレーションセンター（以下 GLOCOL という）は、2007年10月に実現した大阪大学と大阪外国語大学の統合に先立ち、両大学の研究教育資源を有効に活かすため、2007年4月1日に設立された。総合大学としての大阪大学と、言語・国際研究を専門とする大阪外国語大学の統合により、国際協力と共生社会に関する研究をさまざまな学問分野で推進し、国際性を備えた人材養成のための教育を開発することが目的である。具体的には、次の目標を掲げている。

大阪大学の教育目標である「教養・デザイン力・国際性」のうち、「国際性」を強化し、国際社会に貢献する。

国際協力やグローバルな問題に個別に取り組む大阪大学の部局や組織を、文系・理系にかかわらず広く有効に連携させ、文理融合の研究を行う。

学内外との連携、国内外の連携を重視し、国際機関、政府開発援助（ODA）機関、大学研究機関、NPO、NGO などとの幅広い関係を築くとともに、官学連携、産学連携、社学連携に取り組む。



2) 背景

グローバル化のなかで現代世界は、政治構造、経済格差、社会生活などあらゆる面で目まぐるしく変化している。貧困、環境、教育、感染症などの課題が地球規模で山積する一方、日本国内では「足もとの国際化」が急速に進んでいる。このような状況のなか、グローバル化した世界の現実について深く理解し、国際性をもって意思疎通し、課題に取り組むことができる有用な人材を養成することが求められている。GLOCOL はこうした要請のもと、文部科学省の特別教育研究経費を受けて設立された。とくに「人間の安全保障 (human security)」実現のための教育研究活動を重視している。

3) センター名について

グローバルコラボレーション(Global Collaboration)を略した GLOCOL という名称は、glocal という言葉に通じる響きにより、local な視点から global な問題に取り組むという姿勢を示すものである。また大阪大学の標語としての「地域に生き世界に伸びる Live locally, grow globally」にも由来している。



4) センター開所記念式典

2007年4月に当センターが開設したことを記念し、記念式典・記念講演を開催した。その後、交流サロンに場所を移し、祝賀会を催した。

[開催日・場所]

2007年6月21日、大阪大学中之島センター佐治敬三ホール

[式次第]

開会挨拶

宮原秀夫 (大阪大学総長)

来賓祝辞

村田直樹 (文部科学省大臣官房審議官)

設立経緯説明

鈴木 直 (大阪大学理事・副学長)

センター概要説明

小泉潤二（GLOCOL センター長）

来賓祝辞

松園万亀雄（国立民族学博物館長）

記念講演

カルロス・ロペス（国連事務次長補、UNITAR（国連訓練調査研究所）事務局長）

閉会挨拶

鷲田清一（大阪大学理事・副学長）



2. 運営体制

1) 運営組織

グローバルコラボレーションセンター運営協議会

GLOCOL は、大阪大学全体としての国際貢献の発展を目的としている。このためグローバルコラボレーションセンター運営協議会（以下「運営協議会」という）は、国際交流推進本部長、センター長および大阪大学の全研究科長により構成される。国際協力と共生社会に関する研究を推進し、研究成果にもとづく社会活動を実践し、それらの分野での人材養成を行うために大阪大学として GLOCOL をどう活用するかなど、GLOCOL の管理運営に関する基本方針を審議している。

2007 年度運営協議会委員

理事・国際交流推進本部長

橋本日出男（議長：2007 年 4 月～8 月）

辻 毅一郎（議長：2007 年 8 月～）

グローバルコラボレーションセンター長

小泉潤二（2007 年 4 月～8 月）

栗本英世（2007 年 8 月～）

文学研究科・文学部

天野文雄

人間科学研究科・人間科学部

近藤博之

法学研究科・法学部	三成賢次
経済学研究科・経済学部	本多佑三
理学研究科・理学部	小谷眞一
医学系研究科・医学部	遠山正彌
歯学研究科・歯学部	米田俊之
薬学研究科・薬学部	山元 弘
工学研究科・工学部	豊田政男
基礎工学研究科・基礎工学部	戸部義人
言語文化研究科	金崎春幸
国際公共政策研究科	床谷文雄
情報科学研究科	今瀬 眞
生命機能研究科	近藤壽人
高等司法研究科	松川正毅

グローバルコラボレーションセンター会議

運営協議会が決定した方針にならい、部局の意思決定を行い、センターの円滑な運営を図るためにグローバルコラボレーションセンター会議（以下「センター会議」という）が設置されている。センター会議は、センター長、副センター長、センターの教授または准教授のうちから、センター長が部門および室ごとに指名する者などで構成される。センター会議では、センターの業務に関する重要事項、教員人事、予算に関する決定を行っている。

スタッフ会議

業務の実務を調整し、実施のための協議を行う場として定期的にスタッフ会議を開催している。スタッフ会議のメンバーは、GLOCOLの教員、研究員および事務職員から構成される。

事務部

設立当初は、研究推進・国際部国際交流課に国際連携係が新設され、GLOCOLの業務を支えた。大阪外国語大学との統合に伴い、2007年10月に国際部国際連携課国際連携係が設置され、事務支援体制はより一層強化された。加えて、1名の特任事務職員と3名の事務補佐員がホームページ作成、セミナー・シンポジウム開催、センター会議議事録作成、業務管理、庶務などにあたっている。

2) 研究部門紹介

研究推進部門、教育開発部門、実践支援部門の3部門にプロセス評価室を加えて事業を進めている。「研究」「教育」「実践」を相互に緊密に結合し、それぞれのフィードバックによる発展を目指すことが特徴である。



研究推進部門

世界各国の先端的研究者による連続セミナーや国際シンポジウムの開催、「人間の安全保障」に関するワークショップ開催、国際共同研究の推進などを行う。

副センター長・准教授	峯 陽一
特任教授	宮本和久
准教授	宮原 暁
特任准教授	石井正子
特任助教	思沁夫

教育開発部門

人間の安全保障、社会開発、プロセス評価/キャパシティ・ディベロップメント、多文化共生、通訳・翻訳学などに関する教育研究プログラムの開発、全研究科共通の国際教育科目の準備、国際インターンシップやフィールドワークなどの実践的研究教育の支援、若手研究者の交流やキャリアパスの開発支援、社会人や市民向けの講座やプログラムの実施などを行う。

教授	津田 守
准教授	住村欣範
特任講師	中川 理
特任助教	常田夕美子

実践支援部門

グローバルコラボレーション（国際協力）に関する実践の支援、JICA との連携協力協定にもとづく事業推進、JICA 地域別研修「人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナーなどのプログラムを実施する。

副センター長・准教授	草郷孝好
特任准教授	上田晶子
特任助教	ヴァージル・ホーキンス

3) オフィス

GLOCOL は、2007 年 4 月に大阪大学中之島センター内にオフィスを開設したことから始まった。2007 年 9 月には吹田キャンパス内ウエストフロントに本部オフィスが設置され、センター長室と主な事務機能が移された。2007 年 11 月 1 日より大阪大学バンコク教育研究センターの事務所内に GLOCOL デスクを設置し、活動を始めた。それぞれのオフィスのあいだはテレビ会議システムを使ってつないでいる。



3. 学内の協力体制

GLOCOL には、グローバルな協力と協働という広いテーマに個別に取り組む部局や組織を、文系・理系にかかわらず有効に連携させるシステムをつくり、新しい教育、研究、実践をする場として機能することが求められている。2007 年度は、学内から 41 名の教員が GLOCOL を兼任し、情報交換を行った。

4. 連携のハブとしての GLOCOL

大阪大学内の連携のハブとなるばかりでなく、国内外の大学、研究機関、国際機関、官公庁・自治体、市民社会などとの幅広いネットワーク構築に着手した。



5. スタッフ紹介

GLOCOLは、センター長のほか、10数名の教授・准教授、特任教員・研究員、そして各部局からの約41名の兼任教員によって構成されている。この組織を大阪大学国際部国際連携課国際連携係、特任事務職員、事務補佐員が支えている。

センター長

教授 小泉潤二 (2007年4月～8月)

教授 栗本英世 (2007年8月～)

副センター長

准教授 草郷孝好 (2007年6月～)

准教授 峯 陽一 (2007年6月～)

教授

津田 守 (2007年10月～)

特任教授

辻 毅一郎 (2007年4月～8月)

宮本和久 (2007年10月～)

准教授 住村欣範 (2007年10月~)
宮原 暁 (2007年10月~)
特任准教授 石井正子 (2007年4月~)
上田晶子 (2007年10月~)
特任講師 中川 理 (2007年4月~)
特任助教 思沁夫 (2007年4月~)
常田夕美子 (2007年4月~)
ヴァージル・ホーキンス (2007年11月~)
特任研究員 三田 貴 (2007年6月~)
福田州平 (2007年7月~)

GLOCOL バンコク現地代表

石高真吾 (2007年11月~2008年3月)

兼任教員

小林 茂教授

文学研究科 文化形態論専攻人文地理学講座

石井正彦准教授

文学研究科 文化表現論専攻日本語学講座

内海成治教授

人間科学研究科 グローバル人間学専攻人間開発学講座

春日直樹教授

人間科学研究科 人間科学専攻基礎人間科学講座

染田秀藤教授

人間科学研究科 グローバル人間学専攻地域研究講座

中川 敏教授

人間科学研究科 人間科学専攻基礎人間科学講座

中村安秀教授

人間科学研究科 グローバル人間学専攻人間開発学講座

平沢安政教授

人間科学研究科 人間科学専攻教育環境学講座

山本ベバリー・アン講師

人間科学研究科 国際交流室

竹中 浩教授

法学研究科 法学・政治学専攻総合企画法政講座

笠井俊夫教授

理学研究科 化学専攻物理化学講座

岩谷良則教授

医学系研究科 保健学専攻医療技術科学分野生体情報科学講座

荻野 敏教授

医学系研究科 保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座

牧本清子教授

医学系研究科 保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座

山本容正教授

医学系研究科 保健学専攻医療技術科学分野生体情報科学講座

石藏文信准教授

医学系研究科 保健学専攻医療技術科学分野機能診断科学講座

黒澤 努准教授

医学部附属動物実験施設

高田健治教授

歯学研究科 分子病態口腔科学専攻口腔分子発育情報学講座

平田收正教授

薬学研究科 附属実践薬学教育研究センター実践教育部

池 道彦教授

工学研究科 環境・エネルギー工学専攻環境資材・材料学講座

塩谷捨明教授

工学研究科 生命先端工学専攻生物工学講座

原島 俊教授

工学研究科 生命先端工学専攻生物工学講座 / 生物工学国際交流センター長

盛岡 通教授

工学研究科 環境・エネルギー工学専攻共生エネルギーシステム学講座

尾方成信教授

基礎工学研究科 機能創成専攻機能デザイン領域制御生産情報講座

久保井亮一教授

基礎工学研究科 物質創成専攻化学工学領域生物プロセス工学講座

真島和志教授

基礎工学研究科 物質創成専攻機能物質化学領域合成化学講座

ジェリー・ヨコタ教授

言語文化研究科 言語文化専攻現代超域文化論講座

大村敬一准教授

言語文化研究科 言語文化専攻現代超域文化論講座

山内直人教授

国際公共政策研究科 比較公共政策専攻現代日本法経システム講座

尾上孝雄教授

情報科学研究科 情報システム工学専攻情報システム構成学講座

堀井俊宏教授

微生物病研究所 附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野

石井 健准教授

微生物病研究所 附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野

有末伸子助教

微生物病研究所 附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野

東岸任弘助教

微生物病研究所 附属難治感染症対策研究センター分子原虫学分野

八木康史教授

産業科学研究所 知能システム科学研究部門複合知能メディア研究分野

西村謙一准教授

留学生センター 日本語教育部門

仁平卓也教授

生物工学国際交流センター

兼松泰男教授

先端科学イノベーションセンター ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー部門

池田光穂教授

コミュニケーションデザイン・センター 臨床&フィールド・コミュニケーションデザイン部門

林田雅至教授

コミュニケーションデザイン・センター 安全コミュニケーションデザイン部門

高部英明教授

レーザーエネルギー学研究センター 高エネルギー密度科学研究部門

特任事務職員

義則昭子

事務補佐員

渡瀬 勉、宮地薫子、佐藤有子（2007年4月～8月）、池宮優子（2007年11月～）

6. 運営経費

GLOCOL は、大阪大学と大阪外国語大学の教育研究資源の融合と相乗効果により、現代社会における国際協力と共生社会の構築のための人材、および真の国際性をもってコミュニケーションし行動する人材の養成を可能とする教育改革を掲げ、特別教育研究経費を概算要求した。

2007 年度は、事業経費として 120,000 千円の特別教育研究経費が認められた。主な経費の支出としては、新規に開設するための人件費と施設借り上げなどの管理費として 90,000 千円の経費を要し、残りを事業費として、部局と分野を横断する教育プログラム開発のためのセミナーやワークショップの開催、ネットワークの構築、地域連携の推進、インターンシップの支援、フィールド調査などに使用した。

外部からの経費として、JICA との連携による「人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナーを実施する受託事業費、研究活動の財源として科学研究費補助金などを確保することができた。

以上の財源の収入内訳を示したのが図 1、経費別支出額を示したのが図 2 である。

図 1: 財源収入内訳

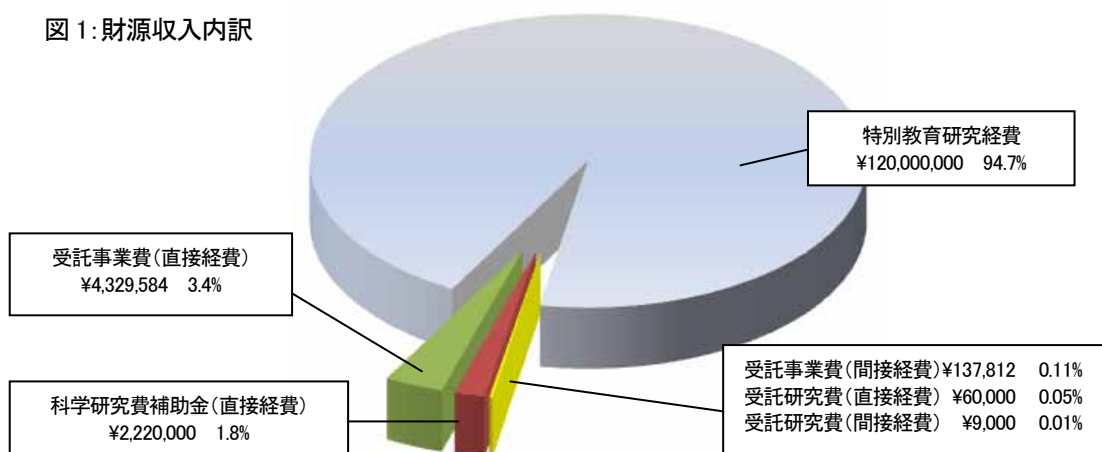
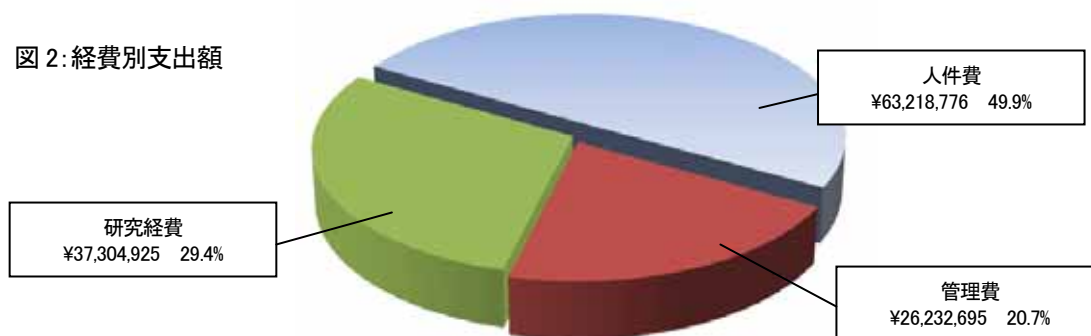


図 2: 経費別支出額



II. 研究活動

[研究推進部門]

世界各国の先端的研究者による連続セミナーや国際シンポジウムの開催、「人間の安全保障」に関するワークショップ開催、国際共同研究の推進などを行う。

1. セミナー / 国際会議の実施

GLOCOL セミナー19回、国際会議1回を開催した。また、他団体主催の5つの会議(pp.82-87参照)の運営に協力した。

1) GLOCOL セミナー

第1回 GLOCOL セミナー

The Role of Evaluation in Understanding How Social and Educational Programs Work: Lessons from Recent Practice in Australia

社会・教育プログラムの効果を把握するための評価の役割：オーストラリアにおける最近の実践からの学び

[講演者(所属・職)]

ジョン・オーエン John M. Owen

(メルボルン大学教育学部プログラム評価センタープリンシパルフェロー)

パメラ・セイント・レジェ Pamela St. Leger

(メルボルン大学教育学部プログラム評価センター上級講師、広島大学教育学部客員教授)

[開催日・場所]

2007年5月14日、大阪大学中之島センター2階講義室

[言語：英語]

[概要]

オーストラリア・メルボルン大学プログラム評価センターの10年にわたる教育と実践経験をもとにして、プログラム当事者を巻き込んだ評価のフレームワークについて検討した。

[講師紹介]

メルボルン大学教育学部プログラム評価センターの初代センター長として評価教育や実践の両面で活躍し、評価教育テキストとして定評のある *Program Evaluation*, 3rd ed. (Allen & Unwin, 2006) の著者。

第2回 GLOCOL セミナー

Exhuming Development: Performance, Reality, Talk, and Subaltern Agency in Contemporary India

開発の発掘：現代インドにおけるパフォーマンス、現実観、サバルタンエージェンシー

[講演者（所属・職）]

アラダーナ・シャルマ Aradhana Sharma

（米国ウェスリアン大学人類学部准教授）

[開催日・場所]

2007年5月23日、大阪大学中之島センター2階講義室

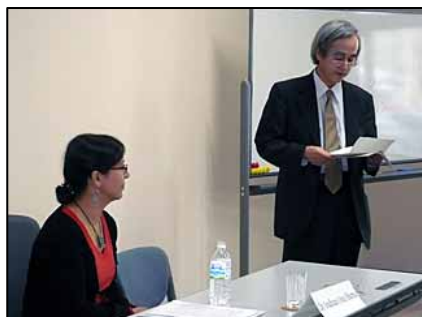
[言語：英語]

[概要]

反開発論に反論する方法をインドの例をもとに講演した。

[講師紹介]

インドの開発、国家建設と開発言説の関係などについて大きな実績をもつ人類学者。1993年にコロンビア大学で国際問題のM.A., 2001年にスタンフォード大学で人類学のPh.D.を取得する。Akhil Gupta との共編書 *The Anthropology of the State* (Blackwell, 2006) ほか、多くの著作がある。



第3回 GLOCOL セミナー

Globalization and Technology: Genetically Modified Crops

グローバリゼーションとテクノロジー：遺伝子組み換え作物

[講演者（所属・職）]

サキコ・フクダ=パー Sakiko Fukuda-Parr

（米国ニュースクール大学大学院客員教授）

[開催日・場所]

2007年5月30日、大阪大学中之島センター2階講義室

[言語：英語]

[概要]

The Gene Revolution: GM Crops and Unequal Development (London and Sterling, Va.: Earthscan, 2006) の著者である講師自ら、遺伝子組み換え作物が開発途上国に与える影響について話した。

[講師紹介]

1995 年から 2004 年まで UNDP (国連開発計画) 『人間開発報告書』の編集主幹を務め、一連の報告書を世界に送り出した。ケイパビリティ理論、キャパシティ・ディベロプメント、技術移転、フェミニスト経済学、人権、民主主義、多文化共生など、幅広い専門領域をもつ。

第 4 回 GLOCOL セミナー

Globalization and Human Insecurities in Africa

グローバリゼーションとアフリカにおける人間不安全

[講演者(所属・職)]

ジョン・アコパリ John Akokpari

(南アフリカ共和国ケープタウン大学政治学科上級講師)

[開催日・場所]

2007 年 6 月 7 日、大阪大学人間科学研究科東館 516 講義室

[言語：英語]

[概要]

深刻化する貧困、食料・栄養不足、健康・教育の危機、不安定なガバナンス、紛争と暴力、難民と国内避難民、環境破壊など、アフリカは近年、人間不安全 (human insecurity) ともいえる状況に直面している。このアフリカの危機は世界に広く知られているが、その構造的な原因についてはあまり議論されていない。とりわけ近年では、グローバリゼーションという外部要因がアフリカの危機の深化に因果関係をもっているのにも関わらず、その因果関係が真剣に検討されることはない。報告では、アフリカの債権国が貧困対策として実施する政策が、逆に人間不安全を招くことがあることを指摘したうえで、アフリカの人間の安全保障の実現には、諸外国にも責任があることを述べた。

[講師紹介]

ガーナ出身の南アフリカの国際政治学者。新潟の国際大学で修士号、カナダのダルハウジー大学で博士号取得。アフリカの民主化、国際関係、開発、移民、紛争、地域統合などについて多くの論文がある。

第5回 GLOCOL セミナー

Shakespeare and Arbitrage-Criticism of Capitalism in the Japanese Market
シェイクスピアとアービトラージ：日本の金融市場における資本主義批判

[講演者（所属・職）]

宮崎広和 Hirokazu Miyazaki
（米国コーネル大学人類学部准教授）

[開催日・場所]

2007年6月22日、大阪大学中之島センター302号室

[言語：日本語]

[概要]

今日の資本主義論において金融（ファイナンス）は一つの中心的テーマとなっている。こうした状況のなかで投機（スペキュレーション）は批判の対象とされるばかりでなく、時として批判の方法としても提示される。本報告では、金融経済学の中心概念であり、金融取引に広く用いられるアービトラージ（裁定取引）の理論的に等価と考えることができる資産の価格の差異を収益の源泉とする取引の概念を投機と対比させた。具体的には、アービトラージを専門とするトレーダーたちへの長期的な調査にもとづいて、アービトラージに内在する特有のあいまいさとアンビバレンスについて考察を加えた。特に岩井克人の著書『ヴェニス商人の資本論』に啓発されたトレーダーたちのアービトラージ論を踏まえ、アービトラージの概念とその実践の背後にある新古典派経済学的前提への確信と疑いの均衡関係に着目した。そしてアービトラージのイメージにもとづいた資本主義批判の可能性を提示した。

[講師紹介]

1998年1月にオーストラリア国立大学太平洋アジア研究学部 Ph.D.(人類学)を取得。東京大学東洋文化研究所外国人研究員、ノースウェスタン大学人類学科客員助教授等を経て現職。フィジー、日本、アメリカ合衆国を研究地域として、贈与交換や貨幣といった経済人類学的な研究のほかに、希望に関する人類学的研究で知られる。主な著作に *The Method of Hope: Anthropology, Philosophy, and Fijian Knowledge* (Stanford: Stanford University Press, 2004)、最近の主な論文に *The Temporalities of the Market* (*American Anthropologist* 105(2): 255-65, 2003)、「改革と希望：証券トレーダーの転職」(小馬徹(編)『カネと人生』雄山閣、2004年)などがある。

第6回 GLOCOL セミナー

The "Iron Cage" of Globalization and Human Security
グローバリゼーションの「鋼鉄の籠」と人間の安全保障

[講演者(所属・職)]

ムスタファ・ケマル・パシャ Mustapha Kamal Pasha
(英国アバディーン大学国際関係学教授)

[開催日・場所]

2007年6月26日、大阪大学中之島センター2階講義室

[言語:英語]

[概要]

この報告では、ネオリベラルなグローバリゼーションの潮流を「鋼鉄の籠」の延長に位置づけた。それは、例えばグローバルな規模での監視活動、合理化のためのさまざまな方法、植民地政府的な性格をもったガバナンスへの回帰などにみることができる。このような状況のなか、人間の安全保障は、オルターナティブを提示することができるのだろうか。この報告では、その可能性を示唆したうえで、人間の安全保障のディスコースのうち、リベラルな解釈を超えることの必要性を述べた。

[講師紹介]

英国アバディーン大学政治・国際関係学科長。アメリカン大学教授、立命館大学客員教授などを経て、現職。人間の安全保障、南アジア政治とイスラームなどについて、活発に発言する。

第7回 GLOCOL セミナー

Training and Deployment of Civilian Peacebuilders and Human Security
平和構築と人間の安全保障のための人材育成

[開催日・場所]

2007年7月17日、大阪大学中之島センター2階講義室

[言語:日本語]

[プログラム]

司会: 峯陽一 (GLOCOL 准教授)

挨拶: 小泉潤二 (GLOCOL センター長・教授)

篠田英朗 (広島平和構築人材育成センター(HPC)事務局長 / 広島大学准教授)

「平和構築分野における人材育成」

栗栖薫子（大阪大学准教授）、松野明久（大阪外国語大学教授）、栗本英世（大阪大学教授）

「平和構築と人間の安全保障のための人材育成」

[概要]

広島大学は2007年度より外務省の委託を受けて「平和構築分野における人材育成パイロット事業」を開始した。これは、世界各地の平和構築の現場で支援を行うために必要となる実践的能力を備えた日本およびそのほかアジア諸国の人材育成を旨とするものである。この事業実施主体が、広島平和構築人材育成センター（Hiroshima Peacebuilders Center: HPC）である。このシンポジウムでは、同事業の説明会を行い、人間の安全保障の観点から平和構築の重要性、平和構築に必要とされる人材は何か、そしてHPCをはじめとする今後の取組に何を期待するのか、など、参加者と共に議論を深めた。

[備考]

共催：広島平和構築人材育成センター(HPC)

第8回 GLOCOL セミナー

Serialized Filipino Identity in Japan

滞日フィリピン人のアイデンティティ：連続的模倣化の考察

[講演者（所属）]

ジョージ・V・ティグノ Jorge V. Tigno

（フィリピン大学政治学准教授）

[開催日・場所]

2007年7月27日、大阪大学中之島センター302号室

[言語：英語]

[概要]

移民のアイデンティティ形成について、滞日フィリピン人の調査をもとにした研究発表を行った。とりわけ、宗教（カトリック）実践、小規模販売業、タガログ語のディスコースなどが日本においてどのように形成されているかについて、具体的な事例を提示しながら報告を行った。

[講師紹介]

フィリピン国立大学政治学科准教授。2006年11月から2007年8月まで京都大学東南アジア研究所の客員研究員として滞日した。

第9回 GLOCOL セミナー

Time Use and Happiness in Bhutan
ブータン人の時間の使い方と幸福感

[講演者(所属・職)]

カルマ・ゲレイ Karma Galay
(ブータン研究所主任研究員)

[開催日・場所]

2007年8月3日、大阪大学中之島センター302号室

[言語: 英語]

[概要]

ブータン人の時間の使い方、幸福との関係について、国民総幸福量(Gross National Happiness, GNH)の調査データをもとにした現在進行中の研究を報告した。労働総時間と幸福との関係について、労働時間が人生における労働以外の時間を奪えば奪うほど、幸福感が失われる、という因果関係を指摘した。

[講師紹介]

ブータン研究センターの主任研究員。計画省のマクロ経済部局の企画官を務めた経験がある。スタンフォード大学において国際政策研究の修士号取得。

第10回 GLOCOL セミナー

Global Public Policy and the Millennium Development Goals (MDGs): A Short History of the World's Biggest Promise
グローバルな公共政策とミレニアム開発目標(MDGs): 世界最大の取り決めにめぐって

[講演者(所属・職)]

デイビッド・ヒューム David Hulme
(英国マンチェスター大学教授・慢性貧困研究所副所長)

[開催日・場所]

2007年9月10日、千里ライフサイエンスセンター9階

[言語: 英語]

[概要]

貧困削減のためのグローバル規模の取り決めであるミレニアム開発目標(the Millennium Development Goals: MDGs)は現代世界の希望となっている。デイビッド・ヒューム博士は、MDGsの形成経緯を述べたうえで、グローバルな公共政策という観点から分析をした。さまざま

まなモラルやリアルポリティークが交錯するなかで生み出された MGDs であったが、内容は共通のモラルを促進し、自己利益を規制する貧困削減のための包括的な目標を盛り込むことができた。しかし、MDGs が実現できるかどうかは、それがいかに一般の人びとの生活態度を変えることができるかにかかわっており、それにはメディアがどのように MDGs を取り上げるかが、大きな影響を及ぼす。

[講師紹介]

慢性貧困研究所 (Chronic Poverty Research Centre: CPRC) は、大学、研究所、NGO の国際パートナーシップの組織として、慢性的貧困の研究とその削減を目指す。ヒューム教授は貧困研究で世界的に知られる開発学者で、この研究所で中心的役割を果たしている。

第 11 回 GLOCOL セミナー

Conflict Prevention and Human Security in Africa: The Case of Darfur

アフリカにおける紛争予防と人間の安全保障：ダルフルの事例

[講演者 (所属・職)]

フセイン・ソロモン Hussein Solomon

(南アフリカ共和国プレトリア大学政治学科准教授)

[開催日・場所]

2007 年 10 月 1 日、大阪大学中之島センター2 階講義室

[言語：英語]

[概要]

スーダン・ダルフルの大量虐殺に関しては、世界中の政策決定者、研究者、NGO が関心をもっているのにも関わらず、それを止めることができていない。フセイン・ソロモン博士は、2007 年 5 月～7 月に行った現地調査にもとづいて、予防外交や平和維持活動がダルフルにおいてどうして失敗したのかを説明した。紛争の根本原因や経緯に言及しながら、紛争を終了させるためには、地域社会の文脈に見合った政策を実施することの重要性を述べた。

[講師紹介]

南アフリカ・プレトリア大学国際政治研究センター長、同大政治学科准教授。アフリカの紛争解決、移民問題、南アフリカの外交政策、国連改革、宗教的「原理主義」などについて数多くの業績がある。

[備考]

共催：大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」 /

日本アフリカ学会関西支部

第12回 GLOCOL セミナー

Post War Reconstruction in the Southern Sudan: Its Achievements and Obstacles, with a Special Reference to the Regional Perspective

南部スーダンにおける戦後復興：達成と問題、および周辺諸国との関係

[講演者（所属・職）]

バルナバ・マリアル・ベンジャミン Barnaba Marial Benjamin

（南部スーダン政府地域協力大臣）

[開催日・場所]

2007年10月23日、GOCOL センター長室

[言語：英語]

[概要]

2005年1月に、スーダン政府と反政府組織 SPLM/SPLA とのあいだで調印された包括的平和協定（CPA）の結果、22年間継続したスーダン内戦は終結し、CPA にもとづいて組織されたスーダン全体の「国民統一政府」（GONU）と「南部スーダン政府」（GOSS）の一国二制度のもと、戦後復興と平和構築が推進されつつある。南部スーダンは、現在のところ主権国家ではないので、南部スーダン政府には外務省がない。地域協力省（Ministry of Regional Cooperation）が、事実上の外務省の機能を果たしている。バルナバ・マリアル・ベンジャミン博士は、南部スーダンが直面する戦後復興と平和構築上のさまざまな問題を、当事者の視点および、地域（regional）の、つまりケニア、ウガンダ、コンゴ、エチオピアなど周辺諸国との関係のなかで論じた。

[講師紹介]

内戦中はゲリラ組織の幹部であり、現在は地域協力省（Ministry of Regional Cooperation）の大臣を務める。



第 13 回 GLOCOL セミナー

Children of Migrants from Burma
ビルマからの移住者の子どもたち

[講演者(所属・職)]

シーブラパ・ペッチャラミーシー Siprapha Petcharamesree
(タイ国マヒドン大学講師)

[開催日・場所]

2007 年 10 月 30 日、大阪大学中之島センター2 階講義室

[言語：英語(通訳あり)]

[概要]

タイには、約 200 万人の非正規移住労働者がおり、その大部分がビルマからの移住者であるといわれている。その半分以上が家族同伴、あるいはタイ国内で家族をつくり、子どもを育てている。タイ - ビルマ国境の仮設住居に住む人口の 45% は子どもである。そのような子どもたちにどのような未来があるのだろうか。タイにおける無国籍の子どもを含む、移民の子どもたちの地位や社会サービスへのアクセスなどについて報告を行った。

[講師紹介]

タイ・マヒドン大学の人権修士プログラムを担当。草の根活動家や NGO とも協力し、市民権、経済的社会的権利、開発の権利、人権を基盤にした貧困撲滅、共同体の権利、草の根レベルでの人権教育などについて研究する。現在、「女性と子どもの権利の保護と促進のためのアセアン委員会の設立に向けて」と題した研究プロジェクトに携わる。国際文化会館のアジア・リーダーシップ・フェロー・プログラムの 2007 年度フェローとして来日。

[備考]

共催：(財)アジア・太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)

第 14 回 GLOCOL セミナー

A Short Introduction to Migration: Major Issues, Trends, Facts & Figures
国際的な人の移動をめぐる諸問題について

[講演者(所属・職)]

谷村頼男 Yorio Tanimura
(国際移住機関(IOM)移住問題総合政策局長)

[開催日・場所]

2007 年 11 月 16 日、大阪大学人間科学研究科東館 316 講義室

[言語：日本語]

[概要]

国際的な人の移動は、1990年代以降規模が拡大するとともに複雑さを増しつつある。この背景としてさまざまな要因が指摘されているが、なかでも外国に関する情報の入手が容易になったことと、海外渡航のコストが急激に低下したことは重要な基本要因である。先進諸国では少子高齢化にともない、いかに外国から必要な労働力を導入するかが大きな政策課題となっている。一方拡大する人口と失業問題を抱える開発途上国では、労働力の輸出が魅力ある対策として注目されている。他方こうした政策の枠外では、先進国の高賃金と高い生活水準にあこがれて不法入国を試みる開発途上国からの移民が急増し、途上事故にあつて死亡したり目的地で搾取されるなど、国際的な人道問題と化している。さらにはこうした状況につけこむ犯罪組織が世界中で人身取引に従事し、莫大な利益をあげるといった状況も出現している。本講演では国際的な人の移動の現状を概観するとともに、国際社会が抱える主要な移民問題を解説し、最後にこれら諸問題への対策を国際移住機関の活動にふれながら説明した。

[講師紹介]

スイス在住、国際移住機関（IOM）移住問題総合政策局長。大阪大学法学部、ハーバード大学大学院アジア研究所（修士）、ニューサウスウェールズ大学法学部（法学士）卒業。外務省アジア大洋州局中国課主席事務官を経て、1995年国際移住機関（IOM）アジア・オセアニア局長、1998年アジア・オセアニア担当上級顧問を経て2004年より現職。

第15回 GLOCOL セミナー

The State of Interpreting / Translation Education and Research in Taiwanese Universities

台湾における通訳翻訳実務および大学・大学院における通訳翻訳教育と研究について

[講演者（所属・職）]

楊承淑 Yang Cheng-Shu

（輔仁大学通訳翻訳学研究所教授兼所長）

[開催日・場所]

2008年1月15日、大阪大学箕面キャンパスC棟3階コンピュータ演習第2教室

[言語：中国語（通訳あり）]

[概要]

台湾におけるガイド通訳、コミュニティ通訳、ビジネス通訳、法廷通訳、会議通訳などの領域における、作業の目的と範囲、仕事内容、作業準備プロセス、技術の種類、関連知識、言語能力について概観し、そのニーズに合わせての教育目標、教材内容、評価内容を分析した。また、台湾の大学・大学院における専門家養成の現状や「台湾通訳学学会」における研究動向を紹介

した。

[講師紹介]

輔仁大学（東方語文学系学士）、東北大学（文学研究科修士）、北京外国語大学（言語学博士）で学び、通訳理論、通訳実務論、通訳教育学、応用言語学を専門とし、1981年以來輔仁大学で教鞭をとる。中国語、英語、日本語での論文等多数。台湾での中日・日中通訳翻訳実践の第一人者。

[備考]

共催：大阪大学大学院言語文化研究科通訳翻訳学専修コース

第16回 GLOCOL セミナー

Plurality and Sustainability: Challenges of Education in Sustainability Studies

多様性、持続性：サステイナビリティ学教育の挑戦

[開催日・場所]

2008年2月15日、千里ライフサイエンスセンター601号室

[言語：日本語]

[プログラム]

挨拶：小泉潤二（大阪大学理事・副学長）

司会：思沁夫（GLOCOL 特任助教）

味埜 俊（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授・サステイナビリティ学連携研究機構兼任教授）「サステイナビリティ学教育の挑戦：高等教育について“サステイナビリティ”の持つ多様性をどう扱うか」

石井善明（大阪大学サステイナビリティ・サイエンス研究機構特任教授）

「サステイナビリティ社会を支える技術と評価手法」

住村欣範（GLOCOL 准教授）

「食の転換期を迎えたベトナムにおける文理協働型の共同研究の可能性について」

全体討論

司会：宮本和久（GLOCOL 特任教授）

パネリスト：味埜 俊（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授・サステイナビリティ学連携研究機構兼任教授）

栗本英世（GLOCOL センター長・教授）

石井善明（大阪大学サステイナビリティ・サイエンス研究機構特任教授）

住村欣範（GLOCOL 准教授）

峯 陽一（GLOCOL 副センター長・准教授）

[概要]

2007年には異常気象の多発に象徴される環境問題が大きく注目された。このような状況は今後も続く予想される。地球環境には危機が迫りつつある。地球環境が大きく変化すれば、われわれ人間を含む生き物たちは生存基盤を失う可能性がある。温暖化、異常気象、水・エネルギー資源の枯渇、人為による自然環境、生活環境の汚染、緑地（森林、草原）の減少、砂漠化などの環境問題の根本解決は、人類が共存、持続性の方向に向かって前進できるかに大きくかかっている。新しい目標に向かって、新たな知の領域を開拓すると同時に、その知を実践できる人材を育成することが必須である。

大阪大学の文理融合研究戦略ワーキングワークショップは、研究者に専門領域を超えて意見交換、議論できる場を提供することを通じて、専門領域、部局を超えたネットワークの構築、連携、共同研究の促進、また新たな知の構築に役に立つことを目指している。

第3回になる今回は、東京大学から味埜 俊教授をお招きした。生物学的排水処理の世界的な権威者である味埜教授は、サステイナビリティ学連携研究機構においてサステイナビリティ学教育の実施責任者を務め、積極的にサステイナビリティ学教育を実践している。大阪大学からは、学際的、国際的研究、交流を精力的に取り組んでおられる石井善明特任教授、住村欣範准教授、さらにさまざまな分野出身のパネルリストの参加をえて、サステイナビリティ学教育を中心テーマに、環境とサステイナビリティ、アジアにおける持続性、学术交流、研究連携などをめぐって熱い議論が繰り広げられた。

[備考]

大阪大学研究推進室 文理融合研究戦略ワーキング 第3回ワークショップ
協力：GLOCOL / サステイナビリティ・サイエンス研究機構

第17回 GLOCOL セミナー

Rwanda's Experience of Post Conflict Reconstruction and Development
ルワンダの経験から学ぶ：紛争後の復興と発展

[講演者（所属・職）]

アロイセア・イニユンバ Aloisea Inyumba
（ルワンダ共和国上院議員）

[開催日・場所]

2008年3月6日、大阪大学人間科学研究科東館106号室

[言語：英語]

[概要]

ルワンダは、つねにフツ人・ツチ人・ツワ人に分断されていた国家ではなく、過去何世紀にも

わたって共通の文化・言語を共有する国民国家として成り立ってきた。しかし、植民地期の政府は、民族間の分断を固定する政策を施行し、民族の多様性は人種間の差異として再構成された。これがその後のルワンダの状況を決定づけ、脱植民地期には、劣悪なガバナンスの結果、最終的には100日間で100万人が殺戮されるという、1994年のジェノサイドが発生した。

紛争後、新しい国民統一政府のリーダーシップのもと、復興・発展に向けて、国民和解の達成と、兵士のDDRRR（動員解除、武装解除、帰還、再定住、社会復帰）が図られた。また、警察や軍隊が再編成され、新憲法も制定された。経済改革も進んでいる。政府要人として紛争後の復興・発展に取り組んできたイニユンバ氏が、これまでの過程と今後の展望を論じた。

[講師紹介]

現職はルワンダ共和国上院議員。ウガンダ、マケレレ大学卒。1994年以降、家族・ジェンダー・社会問題省大臣、国民統一と和解委員会委員長、キガリ・ンガリ州知事などを歴任。

[備考]

主催：グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」/GLOCOL
共催：日本アフリカ学会関西地区例会 / 独立行政法人国際協力機構大阪国際センター（JICA 大阪）

第18回 GLOCOL セミナー

In Search of a New Research Platform for Chinese Area Studies

現代中国学の新たなプラットフォーム

[開催日・場所]

2008年3月9日、大阪大学中之島センター3階講義室

[言語：日本語]

[プログラム]

趣旨説明：田中 仁（大阪大学法学研究科）

（第1部）

司会：宮原 暁（GLOCOL）

西村成雄（大阪大学人間科学研究科）

「20世紀中国政治変動の経路依存性」

青野繁治（大阪大学言語文化研究科）

「中国現代文学教育の在り方について：理想と現実」

片山 剛（大阪大学文学研究科）

「中国における『近代』への対応をめぐって：土地調査事業と土地改革」

(第2部：討論)

司会：堤 一昭 (大阪大学文学研究科)

ディスカッサント：

田中 仁 (大阪大学法学研究科)

「近代中国の制度変容と東アジア地域秩序」

今泉秀人 (大阪大学世界言語研究センター)

「文化現象としての文学研究」

宮原 暁 (GLOCOL)

「帰るべき場所：フィリピンの中国系住民と『中国』」

総括：許 衛東 (大阪大学経済学研究科)

[概要]

抽象し一般化するという科学における一つの方向性にもかかわらず、「中国学」の研究対象は、客観性を越える存在感をもって私たちに迫ってくる。それは、私たちが生きているあいだに「中国学」のごく限られた部分しか触れることができないということと相まって、私たちにあって中国が情緒的な側面を抜きにして語ることはできない存在であることによる。

本セミナーでは、現代中国学を担う3名の研究者が、それぞれの研究課題に向かい合うなかで、どのように個別性と一般性との緊張関係を意識してきたかという点から現代中国学の広がりや深さを展望し、大阪大学における新たなプラットフォームの可能性を模索した。

[備考]

大阪大学中国文化フォーラム第1回セミナー

主催：大阪大学中国文化フォーラム

共催：GLOCOL

協賛：大阪大学人間科学研究科グローバル人間学専攻 / 大阪大学外国語学部中国語教室



第 19 回 GLOCOL セミナー

University, Democracy and Development: Perspective from Latin America

大学、民主主義と発展：ラテンアメリカからの展望

[講演者（所属・職）]

サロモン・L・フェブレス Salmón Lerner Febrés

（ペルー・カトリック大学名誉学長・教授）

[開催日・場所]

2008 年 3 月 21 日、大阪大学中之島センター2 階講義室

[言語：スペイン語（通訳あり）]

[概要]

ラテンアメリカにおいて、高等教育機関が担っている主なタスクの一つは、持続的かつ安定した発展 [開発] を遂げるのに必要な知的な指針を示すと同時に、知的資源を提供することである。その目的の実現には、大学が担う任務の 2 つの面にこれまで以上に力が注がなければならない。まず実利的な意味で、ラテンアメリカの大学間の連携が急務である。連携の結果、それぞれの国の発展 [開発] のためにより多くの、優れた人的かつ技術的な資源が提供されるからである。また、大学は発展 [開発] に関する複合的かつ統合的なコンセプトを創出する役割を担わなければならない。大学が発展 [開発] に知的な寄与を果たすのは必要不可欠である。

ラテンアメリカ地域の国々は、もっぱら技術的かつ経済成長に偏った考えと大衆迎合主義のあいだを揺れ動いているからである。だからこそ、大学は知的な側面で発展 [開発] に寄与しなければならない。ラテンアメリカの大学は、安定した良き統治の実現に向けて、思想的な指針、特に倫理上の指針を確立するような総合的な省察を忘れてはならない。それは人間開発だけでなく、甦らすべきユマニスト思想の伝統にも、今現在、考えを巡らせるかどうかにかかっている。ユマニズムは、すべての大学が発展に貢献する際の重要な指針でなければならないからである。

[講師紹介]

ペルー・カトリック大学名誉学長・教授。ルーヴァン・カトリック大学（ベルギー）で哲学博士号を取得（1973）。1994 年から 2004 年まで、ペルー・カトリック大学長。その間「ラテンアメリカ大学連合」UDUAL の会長、2000 年から 2003 年まで大統領直属の「真実の究明と和解のための委員会（Comision de la Verdad y Reconciliacion）」の委員長を歴任。人権擁護に尽くした功績により、フランスのレジオン・ド・ヌール騎士勲章をはじめ、内外のさまざまな機関から数多くの勲章を受ける。近著に *Universidad, Fe y Razon* (Lima, 2007) がある。

2) 国際会議

グローバリゼーション、差異、人間の安全保障

Globalization, Difference, and Human Security

[コーディネーター]

小泉潤二 (大阪大学理事・副学長)

栗本英世 (GLOCOL センター長・教授)

ムスタファ・ケマル・パシャ (英国アバディーン大学国際関係学教授)

峯 陽一 (GLOCOL 副センター長・准教授)

[開催日・場所]

2008年3月12日～14日、大阪大学中之島センター10階佐治敬三メモリアル・ホール

[言語：英語]

[プログラム]

2008年3月12日

Welcome:

Professor Eisei KURIMOTO, Osaka University, Japan, Director GLOCOL

Opening Address:

Professor Kiyokazu WASHIDA, President of Osaka University, Japan

Conference Theme:

Professors Eisei KURIMOTO, Yoichi MINE & Mustapha Kamal PASHA

(Co-conveners)

SESSION I : Rethinking Human Security: Conceptual and Historical Possibilities

Chair:

Professor Sandra HALPERIN, Royal Holloway, University of London, UK

Presenters:

Professor David CHANDLER, Westminster University, UK

Human Security: the Dog That Didn't Bark

Professor Craig N. MURPHY, Harvard University, USA

*Can the Human Security Paradigm Inform an International Relations that
Accepts Difference?*

Professor Heloise WEBER, University of Queensland, Australia

Cultural Politics of Globalization and Human (In) Securitities

Professor Giorgiandrea SHANI, Ritsumeikan University, Japan

Towards a Critical Human Security Paradigm: Globalization, Human In/Security and Cultural Diversity

SESSION II : The National Imaginary, Globalization, and Human Security

Chair:

Professor Yoichi MINE, Osaka University, Japan

Presenters:

Professor Jan NEDERVEEN PIETERSE, University of Illinois at Urbana-Champaign, USA

Global Multiculture: Cultures, Transnational Culture, Deep Culture

Professor Kuniko MIYANAGA, Tama University, Japan

Globalization and Identity

Professor Matt DAVIES, Newcastle University, UK

Culture and Globalization Revisited: Transculturality, Creative Practice, or Oeuvre? A Critique of Neo-Smithian Conceptions

Professor Sanjay SETH, Goldsmith College, University of London, UK

Globalization as the End of Difference? A Postcolonial Dissent

SESSION III : Neoliberal Governance and Difference after 9/11 & 7/7

Chair:

Mustapha Kamal PASHA, University of Aberdeen, UK

Presenters:

Professor Sherene RAZACK, University of Toronto, Canada

Gender, Race, and the Casting Out of Muslims from Political Community

Professor Hiroyuki TOSA, Kobe University, Japan

"New Wars" under Neoliberal Governance: Beyond Absolute Antagonism

Professor Angharad Closs STEPHENS, Durham University, UK

Time, Community, and Human Security

Professor Siba N'Zatioula GROVOGUI, John Hopkins University, USA

Timbuktu Was Never Far Away: the Rule of Law, Transhumance, and Citizenship after September 11, 2001

Professor Anna M. AGATHANGELOU, York University, Canada

Neoliberal and Terror-Necrotic Regimes and the New World Order: Sacrifice Economies, Insecurities and Eurasia

2008年3月13日

SESSION IV : Human Security in a 'Neoliberal' Global Context

Chair:

Professor Eisei KURIMOTO, Osaka University, Japan

Presenters:

Professor Yasunobu SATO, University of Tokyo, Japan

The Rule of Law, but Whose Law? Law and Judicial Reform Assistance in Peace-Building in Asia

Professor Claudio González PARRA, Universidad de Concepción, Chile

Different Indigenous Identities in a Semi-Globalized Context: Symbolization and Cultural Recognition

Professor Noriko HATAYA, Sophia University, Japan

Resource Mobilization under Extreme Conditions: Community-Based Local Development and Peace-Initiative in Colombia

Professor Timothy M. SHAW, University of the West Indies, Trinidad and Tobago

Africa and Elusive 'Human Security' in the 21st Century: Insights from a 'Problematic' 'Liberal Peace' in Uganda

SESSION V : The Antinomies of Globalization and Human (In) Security

Chair:

Professor Junji KOIZUMI, Osaka University, Japan

Presenters:

Professor Sandra HALPERIN, Royal Holloway, University of London, UK

Globalization, Nationality, and Human Insecurity: Reflections on Local and World History

Professor Branwen Gruffydd JONES, Goldsmith College, University of London, UK

Human (In) Security in a Neoliberal City: A Postcolonial Perspective

Professor Martin WEBER, University of Queensland, Australia

The Fantastic Social World of Human Security through Global Governance: Notes Towards a Critique

SESSION VI : Interpolation, Human Security, and the 'Crisis of Meaning'

Chair:

Professor David CHANDLER, Westminster University, UK

Presenters:

Professor Anca PUSCA, University of Birmingham, UK

Space and Human Insecurity: The Case of Transitioning Central and Eastern Europe

Professor Robbie SHILLIAM, Victoria University of Wellington, New Zealand

The 'Human' as Interpolated Subject: Maori Struggles in New Zealand and the Antinomies of 'Human Security' as a Concept

Professor Vanessa PUPAVAC, Nottingham University, UK

Human Security and the International Crisis of Meaning

Professor Mustapha Kamal PASHA, University of Aberdeen, UK

Islam, Nihilism, and Human Insecurity

2008年3月14日

SESSION VII : Non-Western Perspectives on Human Security*Chair:*

Professor Craig N. MURPHY, Harvard University, USA

Presenters:

Professor Junji Koizumi, Osaka University, Japan

Human Security and Interpretative Approach

Professor Pinar BILGIN, Bilkent University, Turkey

Globalization of World Politics, Transformation of "Traditional" Societies and Persistence of Human Insecurities

Professor Makoto SATO, Ritsumeikan University, Japan

Human Security and Japanese Perception

Professor Yoichi MINE, Osaka University, Japan

Human Security: A Conceptual Exploration

SESSION VIII Human Security in Global and Local Contexts*Chair:*

Professor Siba N'Zatioula GROVOGUI, John Hopkins University, USA

Presenters:

Professor Eisei KURIMOTO, Osaka University, Japan

Human (In)security under War Situation: The Case of Southern Sudan

Professor Seira TAMANG, Centre for Social Research and Development, Nepal

Gender, Citizenship, and Human Insecurity

Professor Yumiko TOKITA-TANABE, Osaka University, Japan

*Recognizing Ontological Equality: Rethinking the Cultural Resources for
Negotiating Differences in Orissa, India*

Professor Eiichi HOSHINO, University of the Ryukyus, Japan

Human Security in Okinawa

SESSION IX : Open Discussion

Chair:

Professor Junji KOIZUMI, Osaka University, Japan

[概要]

シンポジウムでは「人間の安全保障」のコンセプトの再検討を行った。「人間の安全保障」は人間社会の多様性を認めるが、「差異」を人間不安全 (human insecurity) の原因にしないためには、どうしたらいいのだろうか。文化変容と民族間、宗教間、派閥間で起こる新たな紛争には、どのような関係性があるのだろうか。トップダウン的なグローバリゼーションの波に反する形で生まれるトランスカルチャーはどのように説明できるだろうか。マルチカルチャリズムは単一文化主義の代替になるのだろうか。時空間が圧縮されたグローバリゼーションのなかで起こる経済的、政治的変容は、個人や共同体を多様なうちに共存させることができるだろうか。シンポジウムでは、このような問題設定にもとづいた報告と議論を行った。

[備考]

主催：大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」 / GLOCOL



2. 「人間の安全保障」プログラム

1) 人間の安全保障コンソーシアムへの参加

GLOCOL は、2007年9月に設立された「人間の安全保障コンソーシアム」に中心メンバーとして当初から参加している（詳細は p.80）。

2) 文理融合研究ワーキング / 文系研究戦略ワーキングにおける「人間の安全保障」

大阪大学研究推進室が実施している文理融合戦略ワーキングには、文系研究戦略ワーキング、文理融合研究ワーキングがあり、GLOCOL はその両方に積極的に貢献している。

文系研究戦略ワーキングでは、2007年12月15日に下記のワークショップを企画・実行した。その成果を GLOCOL ブックレットとして出版する予定である。文理融合研究ワーキングでは、2008年2月15日に開催された「多様性、持続性：サステナビリティ学教育の挑戦」と題するワークショップをサステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）と協力して実施・運営した。文理融合の観点からサステナビリティ学に取り組み最先端での研究者を招いた同ワークショップは高い評価をえた。

文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障：第3回ワークショップ」

「ポストコンフリクトにおける人間の安全保障」

Human Security in the Post-Conflict Era

[開催日・場所]

2007年12月15日、大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

[言語：日本語]

[プログラム]

【問題提起】

栗本英世（GLOCOL センター長・教授）

【報告1】

石井正子（GLOCOL 特任准教授）

「フィリピン南部の紛争と人権侵害：保障されない個人の安全」

【報告2】

内海成治（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

「ポストコンフリクト教育支援のためのディスコース」

【報告3】

下田道敬（国際協力機構(JICA)・国際協力専門員）

「最近のアフリカの地方分権化改革と日本の支援：サービス・デリバリーと人間の安全保障の観点から」

【総合討論】

司会：小泉潤二（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

[概要]

第3回「人間の安全保障」ワークショップでは、とくに紛争中と紛争後の国や地域における人間の安全保障の問題に焦点をあてた。武力紛争下では、人間の安全保障はもっとも脅かされた状況に置かれる。また、紛争後の状況下では、戦後復興、反政府組織との権力分有、平和構築とDDRといった課題が山積している。いずれも、人間の安全保障を考えるうえで、きわめて重要な課題である。総合討論では、国際協力や開発援助をめぐる、研究者と実務家とのあいだの対話と連携の可能性などについて話し合われた。

大阪大学研究推進室 文理融合研究戦略ワーキング 第3回ワークショップ

「多様性、持続性：サステイナビリティ学教育の挑戦」

Plurality and Sustainability - Challenges of Education in Sustainability Studies

（詳細は pp.23-24）



3) 図書の購入

GLOCOL 教員による個人・共同研究、教育プログラムの開発、JICA（国際協力機構）との連携事業の実践、プロセス評価室の設置準備のために、「人間の安全保障」「グローバリゼーション」「環境問題」「開発学」「人類学」「国際政治学」「公共政策」「教育プログラム開発」「多文化共生」「ジェンダー」の категорияの図書を 622 冊購入した。図書は中之島センター302号室に配架されている。

3. 国際連携

1) 外国人招へい研究者

[招へい者名(所属・職)]

フセイン・ソロモン Hussein Solomon

(南アフリカ・プレトリア大学国際政治研究センター長、同大政治学科准教授)

Director of the Centre for International Political Studies, Associate Professor of the Department of Political Sciences, University of Pretoria)

[期間]

2007年9月18日～10月20日

[用務]

共同研究および講演のため



2) 国際会議、セミナーの開催

これまでも見てきたとおり、GLOCOL では国際会議、セミナーの積極的な開催を通じて国際連携を推進している。セミナーでは海外からの研究者、実務家を16人、国際会議では23人の海外研究者を招き、第一線の研究や国際協力の実践について意見交換を行った(pp.12-32 参照)。

3) バンコク GLOCOL デスク

2007年11月1日に大阪大学バンコク教育センターの事務所内にGLOCOL デスクを設置し、JICA 地域別研修のファシリテート、チュラロンコーン大学との研究協力、関係者への大阪大学およびGLOCOL の紹介を行った(pp.78-79 参照)。

4) JICA との連携事業

大阪大学とJICA との連携協力協定にもとづく活動をGLOCOL が窓口となって推進することになった。これにより、大阪大学が国際化とグローバル化という状況に対応した役割を果たすことが目的である。2007年度は、連携協力協定のうち、(5)国際協力のための研修プログラム実施、(6)学生の青年海外協力隊への参加に対する支援、(7)学生のJICA インターンシップへの参加に対する支援、を中心に実施した(p.37 参照)。

[教育開発部門]

人間の安全保障、社会開発、プロセス評価 / キャパシティ・ディベロップメント、多文化共生、通訳・翻訳学などに関する教育研究プログラムの開発、全研究科共通の国際教育科目の準備、国際インターンシップやフィールドワークなどの実践的研究教育の支援、若手研究者の交流やキャリアパスの開発支援、社会人や市民向けの講座やプログラムの実施などを行う。

4 . 教育プログラムの開発

1) GLOCOL における教育事業の位置づけ

GLOCOL の主要業務の一つは、部局と分野を横断し単一の専攻や研究科では扱うことのできない教育研究プログラムを開発することである。GLOCOL が開発を進める教育研究プログラムは、制度的には「大学院高度副プログラム」(以下「高度副プログラム」という)に位置づけられる。GLOCOL の高度副プログラムは、2009 年度に試行プログラムを走らせ、2010 年度から本格的に実施することを目ざしている。対象は、修士課程の大学院生である。実施に向けた準備作業は、以下の通り進められた。

2) 2007 年度の準備状況

事前調査

学際融合教育研究プラットフォームを GLOCOL スタッフが訪問し、研究科横断型プログラム実施にあたっての基本的事項について情報を収集した。また、GLOCOL と同様に、科目開講権限はないが先行して教育プログラムを提供しているサステナビリティ・サイエンス研究機構 (RISS) の担当者に対して、プログラム開発にあたっての経緯について聞き取りを行った。

高度副プログラムは、既存の開講科目を組み合わせたものと、新規に科目開講するものに分けることができるが、実際には両者を合わせた形で行われることが多い。そのため、既存の開講科目を把握することが開発にあたって重要になる。そこで、2007 年度の各研究科の開講科目の状況を明らかにするために、これらを表にまとめた。

通訳翻訳学プロジェクト会議開催

GLOCOL が目ざしている教育プログラムの一つとして通訳翻訳学教育がある。これは、大阪外国語大学との統合に関する参議院文教科学委員会における審議でも文部科学省高等教育局長によって言及されており、社会的な責任は非常に大きい。GLOCOL では、2008 年 1 月 11 日に「通訳翻訳学プログラム会議」を開催した。この会議には GLOCOL スタッフだけでなく、通訳翻訳学に関する諸研究科の長も参加し、「通訳翻訳学」教育プログラム開発の経緯、そして開発スケジュールなどについて参加者で認識を共有した。

教育開発タスクフォース会議開催

GLOCOL の教育プログラムには、通訳翻訳学だけでなく、人間の安全保障、社会開発、プロセス評価、多文化共生などさまざまな分野が含まれる。それらを専門とするスタッフが中心となって、今後具体的なプログラムの開発にあたることになる。そうした中心的役割を果たすスタッフが認識を共有するため、2008年2月14日に「教育開発TF会議」が開催された。教育プログラムのクラスターを再検討し、実施の方法などについて基本的な知識を共有した。

[実践支援部門]

グローバルコラボレーション（国際協力）に関する実践の支援、JICA との以下の連携協力協定にもとづく事業を推進する。

大阪大学と独立行政法人国際協力機構（JICA）は、日本と開発途上地域の人びとの平和で豊かな世界の実現を旨とし、開発途上地域への国際協力にかかわる事業の推進に向けて、大阪大学の全学的研究・教育の成果と JICA の現実実践を生かした連携を、相互に可能な分野において行うため、2007年2月に連携協力協定を締結した。

連携目的

- (1)国際協力に関する研究の推進
- (2)国際協力を資する人材の育成
- (3)その他国際協力にかかわる事業の実施

連携協力

- (1)国際協力にかかわる研究の推進と成果の公開
- (2)国際協力にかかわる啓発的事業の実施
- (3)講師の相互派遣その他大阪大学と JICA 間の人的交流
- (4)国際協力のための専門家及び調査団の派遣
- (5)国際協力のための研修プログラムの実施
- (6)学生の青年海外協力隊等への参加に対する支援
- (7)学生の JICA インターンシップへの参加に対する支援
- (8)国際協力を携わる要員の教育・訓練に対する支援
- (9)施設の相互有効利用
- (10)その他、双方が合意する連携プログラム

2007年度は、上記の連携協力協定のうち、(5)国際協力のための研修プログラムの実施、(6)学生の青年海外協力隊等への参加に対する支援、(7)学生の JICA インターンシップへの参加に対する支援、を中心に実施した。

5 . 2007 年度 JICA 地域別研修

「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー

1) 研修の背景

グローバル化の時代、私たちの社会は、国境を越えるさまざまなリスクにさらされている。武力紛争、迫害、テロリズムといった政治的脅威、HIV/AIDS や鳥インフルエンザなどの感染症、地震や水害などの自然災害、食や水の汚染、巨大科学技術の発展がもたらす複合事故、労働環境の劣悪化、広域的な経済危機の可能性など、リスクの一覧表は限りなく続く。「人間の安全保障」は、これらのリスクがもたらす恐怖と欠乏から人びとを守り、一人一人に安全を保障しようとする公共の営みである。

人間の安全保障の考え方は、1994年にUNDP(国連開発計画)によって提唱され、2003年の人間の安全保障委員会最終報告書(「緒方・セン報告書」)で練りあげられ、現在では日本政府のODA政策の柱としても位置づけられている。本研修事業では、人間の安全保障の考え方をアジアの文脈と「キャパシティ・ディベロップメント」の考え方と結びつけて、いっそう実践的なものにしていく試みである。深刻なダウンスайд・リスクを乗り越えていくためには、「上からの保護」を提供するだけでなく、草の根の人びと、NGO、そして地方自治体やさまざまな公共機関が「下からの問題解決能力」を身につけていくことが不可欠である。

2) 研修の概要

こうした背景のもと、地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー(英語名: Seminar on Sustainable Human Security and Capacity Development)をJICAから受託し、GLOCOLが受託機関として研修コンテンツを作成するとともに運営を行った。本研修の目標は、「人間の安全保障」を達成するために活動する地方自治体、NGOの問題解決能力を高めることで、「人間の安全保障」と「キャパシティ・ディベロップメント」という二つの考え方をローカルな文脈で再構成し、実践的な「知識」を創出する機会を提供することである。第1回目である2007年度の研修には、アジアの8カ国(インドネシア、ベトナム、ラオス、タイ、カンボジア、スリランカ、ネパール、フィリピン)から11名(行政職員またはNGO職員)が参加した。

研修は大きく分けて3部(「1次研修」「アクションリサーチ」「2次研修」)で構成されている。日本で行われた「1次研修」では、JICA大阪および大阪大学において人間の安全保障とリスクに関する講義を行った。研修生は各種のワークショップを通じて、現場で活用できるキャパシティ・ディベロップメントの手法を学んだ。またフィールドビジットとして、神戸を訪問し、阪神大震災に関する事例を学んだ。「1次研修」の後半には熊本県水俣市を訪問した。水俣病をはじめとする公害病は、日本の高度成長が生み出した深刻なダウンスайд・リスクであることから、水俣では、患者・市民・行政が手を携えて地域を復興させる取り組みを学んだ。

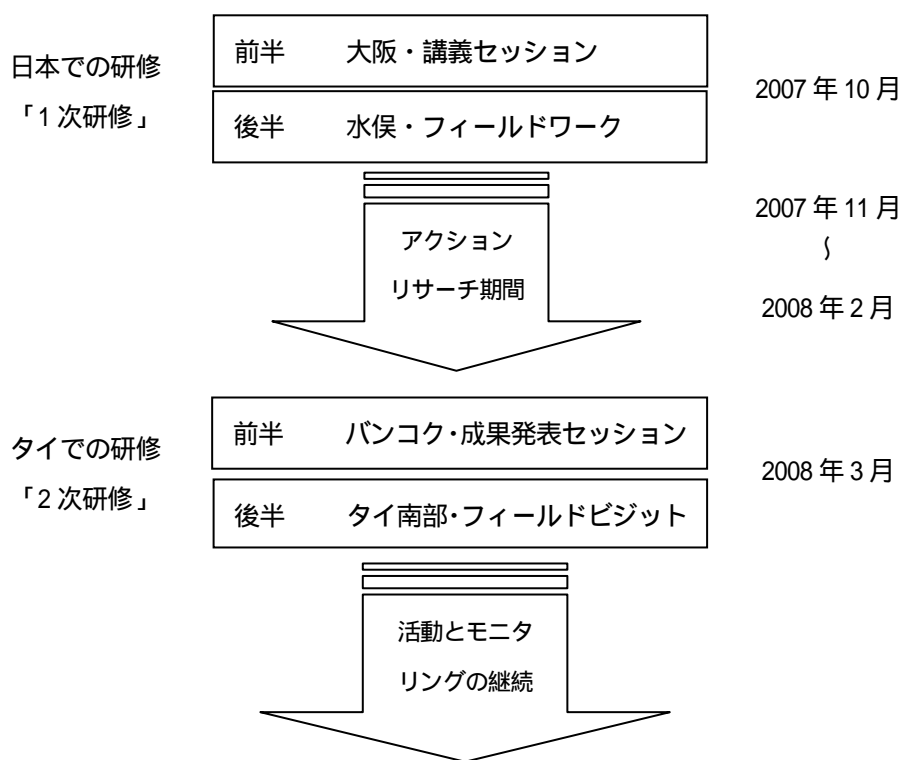
日本での「1次研修」で学んだことを各受講者が実際に本国で試行する機会として、「アクションリ

サーチ」期間が設けられた。すべての参加者は、それぞれの出身国で4ヶ月間にわたってアクションリサーチを実施し、最終報告書にまとめた。

「2次研修」は、チュラロンコン大学の協力のもと、タイで実施した。再集合した研修生はアクションリサーチの報告を行い、それぞれのリサーチのプロセスと結果や教訓を互いに共有し合った。またタイでは、タイ南部のラノン県およびバンガー県を訪問し、津波、不法移民、無国籍民の問題など、人間の安全保障の新たな課題をテーマにフィールドビジットを行った。

3) 研修内容

研修は、次のような流れで実施した。



1次研修[日本における研修：2007年10月11日～30日]

- ・大阪での研修では、次の講義などを実施した。
 - (ア) エンパワメント評価に関するワークショップ
 - (イ) キャパシティ・ディベロップメントに関する講義
 - (ウ) 人間の安全保障の基本的な定義・概念に関する講義（国際公共政策研究科と連携）
 - (エ) 人間の安全保障と科学技術、健康、環境、水に関する講義（サステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）、医学部、工学部、コミュニケーションデザインセンターと連携）

- ・自然災害のリスクをテーマに、阪神淡路大震災に関する神戸フィールドワーク。「人と防災未来センター」および「ひと未来館」を訪問した。
- ・熊本県水俣市を訪問し、戦後の産業化の過程で引き起こされた、水俣病に起因する社会および環境への影響と、そこから立ち直るためのコミュニティ再興のための実践として編み出された「地元学手法」を中心に、以下の研修を行った。
 - (ア) 水俣のコミュニティ主体の祭礼に参加し、農村地区のコミュニティの変容について理解を深めた。
 - (イ) 水俣市立水俣病資料館にて、各種展示資料の見学と水俣病患者（語り部）による語りによって、水俣病による被害・リスクについての理解を深めた。
 - (ウ) 「環境先進モデル都市」水俣における行政と市民の協働事例として、水俣の女性グループの活動、中学校の取り組み、伝統的な紙作りによる取り組みを学んだ。
 - (エ) 地元学手法研修では、水俣市越小場地区にて、民泊体験、実習および地区住民との交流から地元学の必要性とその進展について学んだ。地元学実践ワークショップでは、越小場地区におけるあるもの探しとコミュニティマップ作りを体験し、研修生の目からみた越小場地区についての発見やアイデアをまとめ、地元住民に還元した。
 - (オ) エンパワーメント評価の第2次ワークショップを実施した。
- ・水俣訪問の後、研修生は大阪に戻り、今回の研修における学びをもとにして、各自がアクションリサーチの内容を検討した。最終日には、研究課題のテーマ、手法、調査計画などを発表した。

アクションリサーチ[2007年11月1日～2008年2月29日]

- ・2007年11月から2008年2月の4ヶ月間をかけて、研修員はそれぞれの国の所属機関に戻り、「1次研修」で学んだことを応用し、アクションリサーチに取り組んだ。
- ・この期間中、GLOCOLのスタッフがそれぞれの研修員に対して、2名で1つの支援チーム体制を敷き、電子メールやテレビ会議を実施するとともに、多くの研修生の国々を直接訪問し、必要なアドバイスを与えた。GLOCOLのウェブサイトにも、本研修用のページを日本語・英語で開設し、第1次研修で活用した資料をダウンロードできるように作成した。必要に応じて、これらの資料活用を促すなどして支援を進めた。
- ・アクションリサーチの総括として、各研修員から、アクションリサーチ報告書の提出、バンコク研修での発表用パワーポイント原稿の提出を課した。

2次研修[タイ：2008年3月1日～10日]

- ・バンコク研修の目的は、タイにおける人間安全保障に関する動向についての理解を深めることと（公開講座およびフィールドビジット）、研修生のアクションリサーチの成果発表の2つであった。
- ・タイ研修の前半は、チュラロンコン大学国際開発プログラムの協力をえて、バンコクにある同大学キャンパスで行われた。公開講座は3名の講師によって行われた。タイ国人間の安全保障スタッフによる政策に関する講義、「バイオタイ」と「エイズアクセス」という市民組織の講師によるタイの抱える食料の安全保障やエイズ問題に関する講義を実施した。アクションリサーチの発表は、1人1時間をもち時間とし、各自が提出したパワーポイント原稿を用い20～30分の口頭発表の後、GLOCOLスタッフと研修生を交えて質疑応答を行った。11のアクションリサーチの事例を研修生全員で学びあった。
- ・タイ研修の後半は、タイ国内の人間の安全保障の課題にかかわるフィールドビジットを実施した。ミャンマーとの国境沿いにあるタイ南部のラノー県、甚大な津波の被害を受けたパンガー県を訪問した。取り扱った課題は、ディアスポラの人びとの事例、ミャンマーからの「不法」移民の事例、漂海民モーケン人の事例、津波被災地域の事例であった。
- ・第2次研修のまとめをパンガー県カオラックにて行った。

4) 成果

- ・1次研修講義：
人間の安全保障の課題に関し、講義により知識の習得が図られた。1次研修では、大阪大学の他の部局との連携を図ることにより、単一の部局では実施しにくい内容の研修プログラムを策定することができた。人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメントというテーマを貫きながらも、分野をまたいだ幅広い視点を提供することとなった。大学の各方面と連携してカリキュラムおよび講義内容を作成することにより、大阪大学とJICAの連携協定の趣旨に沿った事業を展開することができた。
- ・1次研修討論・実習・演習・発表：
エンパワメント評価、神戸での震災ゲーム、水俣での絵地図作り、アクションリサーチの作成など、参加型の学習の機会を要所に組み込むことによって、研修生は主体的にプログラムにかかわることができ、共同作業も活発に行われた。

・ 1次研修見学：

水俣および神戸における訪問を通じ、研修生に日本における具体的な事例を学ぶ機会を提供することができた。とりわけ水俣では、自治体関係者、語り部、住民、NPO職員など、地元からの協力をえることができ、人と人の交流にもとづく相互学習が達成された。

・ アクションリサーチ：

GLOCOLの教員・研究員による支援体制を敷き、アクションリサーチ期間を含めて専門的かつ細やかなアドバイスを行った。

・ 2次研修講義：

人間の安全保障の先進国ともいえるタイの政策面に関する講義によって政府レベルの取り組みと現在の課題についての理解を深めることができた。また、「バイオタイ」と「エイズアクセス」という市民組織の講義により、市民社会形成について考える機会をえた。これらの講義内容は、東南アジア、南アジアの国々が抱える問題と共通するため、研修生は深く学ぶことができた。

・ 2次研修討論・実習・演習・発表：

各研修員によるアクションリサーチ発表の際、研修生から積極的な質疑やコメントが出されたことは高く評価できる。また、ラノー県とパンガー県における訪問研修では、グループワークによって学びの振り返りを行った。ここでは、研修生自身がファシリテーションや報告者のスキルを学ぶことも目的とし、第1次研修を補足することを試みた。

・ 2次研修見学：

ラノー県、パンガー県におけるフィールドビジットの研修では、研修生に生きた学びの機会を提供することができた。モーケン人やディアスポラの抱えるリスクの問題や津波被災地のコミュニティの復興について、生活の現場に足を運んで生活者へのヒアリングなどを行った。

・ 本年度はアジアを対象とした研修を実施したが、2008年度はアフリカを対象に、2009年度は中南米を対象とした研修を行う。継続して本研修事業を実施することによって、各地域に固有な課題や他地域とも共通する課題が明らかにされるだろう。



6. 青年海外協力隊特別募集説明会の実施

JICA との連携協力協定にもとづき、大阪大学の学生に対して青年海外協力隊募集説明会を 2 回実施した。説明会では帰国隊員の体験談などが紹介された。

2007 年 7 月 4 日

[場所]

大阪大学コンベンションセンター2 階会議室（吹田キャンパス）

[プログラム]

開会・プログラム説明

青年海外協力隊ビデオ上映「そして、世界は広がった。」

青年海外協力隊事業趣旨説明・概要説明

帰国隊員の体験発表

岡本和恵（2004 年 4 月～2006 年 7 月 中国 職種：日本語教師）

中条典彦（2003 年 7 月～2005 年 9 月 セントビンセント 職種：数学教師）

質疑応答

2007 年 10 月 19 日

[場所]

大阪大学コンベンションセンター2 階会議室（吹田キャンパス）

[プログラム]

開会・挨拶・プログラム説明

青年海外協力隊ビデオ上映

青年海外協力隊事業趣旨説明・概要説明

帰国隊員の体験発表

佐々木正大（2004 年 4 月～2006 年 4 月 ブータン 職種：公衆衛生）

質疑応答

挨拶：栗本英世（GLOCOL センター長）



7. JICA 大阪夏期インターンシップ実習事業

大阪大学と JICA との連携協定にもとづき、国際協力に関心をもつ大学生・大学院生を対象に、JICA 大阪国際センター（JICA 大阪）にインターン実習生を派遣する事業を実施した。本事業の目的は、学生に実務経験の場を提供し、国際協力に携わる人材を育成することである。

インターン実習生の公募は、GLOCOL が大阪大学での窓口となって行われた。応募資格をもつ対象者は、大阪大学の学部または大学院に在学中の者で、国際協力や開発援助に深い関心をもち、将来的に国際協力に関連した仕事に携わる意志をもった者とした。実習では、JICA 大阪の事業（研修員受入事業・開発教育支援事業・広報事業など）のうち、業務補助および調査研究を行うこととされている。

2007 年度に本プログラムにより派遣されたインターン実習生は、法学部学生 1 名、人間科学部学生 1 名、人間科学研究科博士前期課程大学院生 1 名、国際公共政策研究科修士課程大学院生 2 名の合計 5 名であり、JICA 大阪業務第三チーム（現：研修業務第一・二課）で実習を受けた。2007 年度の実習生は、JICA 大阪の実施する研修員受け入れ事業「タンザニア地方政府改革プログラム」を取りあげ、5 ヶ年に渡って実施された同研修プログラムのとりまとめを行った。加えて実習生は、研修の受託機関である大阪大学法学部・法学研究科教員および茨木市職員に対するインタビュー調査、ホームビジットのアンケート調査を実施し、研修事業が受託機関に与えたインパクトを明らかにした。これらの活動からえられた情報をもとに、研修プログラムの課題をまとめ、JICA への提言を含める形で報告書が作成された。実習期間は、2007 年 8 月から 10 月にかけて、1 人につき 2～3 週間であった。

（プロセス評価室）

8. プロセス評価室の設置

GLOCOL 発足により、プロセス評価室を設置した。2007 年度のプロセス評価室は、草郷孝好副センター長により運営され、外部協力スタッフである和栗百恵客員講師（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）の支援をえながら、下記の活動を推進した。

1) 評価セミナーの実施

プロセス評価室では、プロジェクトや組織活動の当事者自身が評価手法を学び、実践に生かすことを目的として、研究、調査、教育活動に取り組むことを掲げている。評価セミナーは、教育の観点から企画された。初年度は、5 月 14 日に 2 名の講師を迎えて、中之島センターにて開催した。

The Role of Evaluation in Understanding How Social and Educational Programs Work: Lessons from Recent Practice in Australia

社会・教育プログラムの効果を把握するための評価の役割：オーストラリアにおける最近の実践からの学び

メルボルン大学教育学部プログラム評価センターは、地域に根ざす地方行政体、教育機関、病院などへの質の高い支援を行ってきている。講師のOwen博士は、同センター初代センター長として、実践に裏打ちされた評価手法のテキストを著すなど、世界的な権威の一人である。

今回、GLOCOL 評価室の柿落としとなるセミナーにて、同センターの10年にわたる実績を踏まえ、当事者主体の評価事例の紹介や評価支援の際の課題などについて、ご講演をいただいた後、参加者と活発に意見交換を行った。また、プロセス評価室とメルボルン大学プログラム評価センターとの協力関係構築に関する意見交換もあわせて行うことができた（詳細は p.12）。



2) GLOCOL 内部のワークショップ実施

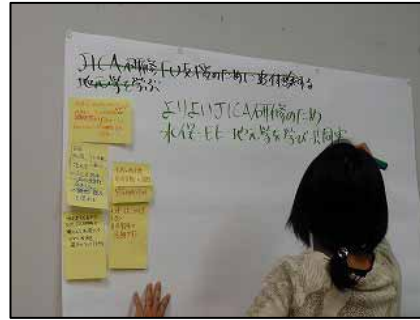
プロセス評価に関する研究や教育の展開もさることながら、評価室では、GLOCOL スタッフ内部においてプロセス評価についての理解を高めてもらうべく、内部研修会を2回開催した。

キックオフ・リトリートの開催（中之島センター、2007年7月9日）

GLOCOL スタッフの参加をえて、和栗百恵客員講師（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）を講師にお招きして、GLOCOL メンバー自身による組織作りに向けたワークショップを行った。内容は、各自の自己紹介を中心としながら、相互のバックグラウンドや研究活動、仕事上での関心や不安などについて共有を目ざした。その上で、今後のGLOCOLという組織の育て方について、意見交換の場を設けることができた。

エンパワメント評価手法に関する導入研修会（熊本県水俣市、2007年11月23日）

GLOCOL スタッフ9名の参加をえて、和栗百恵（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）を講師とし、エンパワメント評価手法に関する導入研修会を行った。GLOCOL 自身の活動の当事者主体の評価手法の候補として、エンパワメント評価を取り上げることがを前提にして、スタッフ間でエンパワメント評価というプロセス評価手法の一つを身につけることを目指した。



3) JICA 研修：エンパワメント評価

JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナーにおいて、当事者主体の活動推進手法の一つとして、エンパワメント評価手法を採用した。研修の結果、アジアからの研修生 11 名のうち 2 名が自身のアクション・リサーチにエンパワメント評価手法を取り入れた。

研修生と課題名：

Teerayuth Kukangwan (Thailand)

Capacity Building for Womens' Occupation Group in Ko Khraim Tai Village Phang Nga Province

S.M. Mohomed (Sri Lanka)

Confidence Building and Stabilization Measures for IDPs



9. スタッフの研究活動

1) スタッフ研究会

GLOCOL スタッフの互いの理解を深め、研究、発表に役立たせるためにスタッフ研究会を開催している。2007年度には8回のスタッフ研究会を実施し、意見・情報交換を行った。内部研究会として行っているが、将来的にはオープンな研究会として関心のある方々にも参加・発表していただき、現在進行中の研究、構想中の研究などについても自由に議論できる研究会を目標としている。

第1回スタッフ研究会

2007年9月25日 於：センター長室

常田夕美子特任助教

「人間の安全保障」とはなにか? : ミクロ人類学的視点から」

第2回スタッフ研究会

2007年10月9日 於：大阪大学中之島センター6F

三田 貴特任研究員

「太平洋島嶼国の未来像：パラオにおけるグローバル化と国家建設」

福田州平特任研究員

「テロ組織の戦略：HAMAS と PKK を事例に」

第3回スタッフ研究会

2007年10月18日 於：大阪大学中之島センター6F

Dr. Hussein Solomon

"Towards a United Nations Emergency Peace Service (UNEPS)"

第4回スタッフ研究会

2007年11月12日 於：センター長室

栗本英世センター長

「ある人類学者の『開発』へのコミットメント：内戦中・戦後スーダンのパリ人」

全体討論

「人文学と開発研究：越境に向けて」

第5回スタッフ研究会

2007年12月21日 於：センター長室

宮本和久特任教授

「環境バイオテクノロジーで地球を救う：バイオマスによる循環型社会づくり」

堀井俊宏教授（GLOCOL 兼任教員・大阪大学微生物病研究所）

「マラリアワクチン開発と保健医療分野における世界貢献」

第6回スタッフ研究会

2008年1月23日 於：センター長室

石井正子特任准教授

「地域研究と人道支援をつなぐ：NGOにおけるデータベース構築の試みより」

ヴァージル・ホーキンス特任助教

「ステルス紛争：国際意識の「レーダー」に引っ掛からない紛争」

第7回スタッフ研究会

2008年2月5日 於：センター長室

峯 陽一准教授

「人間の安全保障とモザンビーク」

第8回スタッフ研究会

2008年3月26日 於：センター長室

上田晶子特任准教授

「開発：研究と実践」

稲葉久之

「アクション・リサーチ研究：JICA 研修事業を事例に」



2) スタッフ個人研究

栗本英世 (くりもと えいせい)

----- センター長 (2007.08-) 教授

【学歴】京都大学文学部卒業 (1980)、京都大学大学院文学研究科修士課程修了 (1982)、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了 (1985) 【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手 (1987)、国立民族学博物館助手 (1992)、国立民族学博物館助教授 (1993)、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授 (1993)、大阪大学人間科学研究科助教授 (2000)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員助教授 (2001-2003)、大阪大学大学院人間科学研究科教授 (2003)、国立民族学博物館地域研究企画交流センター客員教授 (2003-2005)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター長 (2007) 【学位】文学修士 (京都大学 1985) 【専攻・専門】社会人類学、アフリカ民族誌学、紛争研究

【主要業績】

[単著]

- 1996 『民族紛争を生きる人びと：現代アフリカの国家とマイノリティ』世界思想社。
1999 『未開の戦争、現代の戦争』岩波書店。

[編著書]

- 2001 *Rewriting Africa: Toward a Renaissance or Collapse?* Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.
2002 Wendy James, Donald L. Donham, Eisei Kurimoto and Alessandro Triulzi, eds., *Remapping Ethiopia*. Oxford: James Currey; Addis Ababa: Addis Ababa University Press; Athens: Ohio University Press.

[論文・分担執筆・共著など]

- 2005 「人種主義的アフリカ観の残影：「セム」「ハム」と「ニグロ」」竹沢泰子 (編) 『人種概念の普遍性を問う：西洋的パラダイムを超えて』人文書院, pp.356-89.
2005 Resurgence in the Midst of Predicaments: Studies on North East Africa by Japanese Anthropologists, 1996-2005. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 5: 69-103.
2005 Multidimensional Impact of Refugees and Settlers in the Gambela Region, Western Ethiopia. *Displacement Risks in Africa: Refugees, Resettlers and Their Host Population*, ed. by I. Ohta and Yntiso D., 338-58. Kyoto: Kyoto University Press.

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

2007 「政治化される宗教：スーダンにおけるイスラームとキリスト教」『JANES ニュースレター』16: 15-23.

2008 「ジョン・ガランにおける『個人支配』の研究」佐藤章（編）『統治者と国家：アフリカの個人支配再考』アジア経済研究所, 165-221.

2008 「教育に託した開発・発展への夢：内戦、離散とスーダンのパリ人」田沼幸子（編）『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院, 45-69.

社会活動・センター外活動

日本学会会議・連携会員

日本文化人類学会・理事

日本アフリカ学会・理事

日本ナイル・エチオピア学会・副会長

公益信託澁澤民族学振興基金・運営委員

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・共同研究プロジェクト外部審査員

ジャパンプラットフォームによるスーダン南部人道支援モニタリングへの参加(2008年1月14日～27日)

海外調査

2007年7月31日～8月28日（スーダン）戦後復興と平和構築に関する調査

2008年3月1日～5日（タイ）JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー 2次研修

小泉潤二 (こいずみ じゅんじ)

-----前センター長(2007.04-08) 理事・副学長

【学歴】東京大学教養学部教養学科卒(1973)、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程修士課程修了(1975)、東京大学大学院社会学研究科文化人類学第1種課程博士課程退学(1980)、スタンフォード大学大学院人類学研究科博士課程修了(1981)【職歴】アルバータ大学キラム記念博士研究員 (Izaak Walton Killam Post-Doctoral Scholar, the University of Alberta, Canada)兼非常勤講師 (Sessional Lecturer, Part-time) (1981)、愛知県立大学文学部講師(1982)、愛知県立大学文学部助教授(1985)、新潟大学人文学部助教授(1987)、大阪大学人間科学部助教授(1990)、大阪大学人間科学部教授(1996)、プリンストン高等研究所招聘研究員 (Ralph and Doris Hansmann Member, The Institute for Advanced Study, Princeton)(1996.09-1997.08)、大阪大学大学院人間科学研究科教授(2000)、大阪大学大学院人間科学研究科長・人間科学部長(2004-2006)、大阪大学研究推進室員(2005-2007)、大阪大学国際交流推進本部員(2005-2007)、大阪大学総長補佐(2006-2007)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター長(2007)、大阪大学理事・副学長、教育・情報室長、附属図書館長(2007-)【学位】人類学博士 (Ph.D., Anthropology, Stanford University, 1981)【専攻・専門】文化人類学、中南米研究、解釈人類学、トランスナショナルリティ研究、コンフリクト研究

【主要業績】

[編著書]

2003 *Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies*. Osaka University Press.

2007 小泉潤二・栗本英世(編)『トランスナショナルリティ研究』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書。

2007 小泉潤二・志水宏吉(編)『実践的研究のすすめ：人間科学のリアリティ』有斐閣。

[翻訳]

2002 ギアツ, クリフォード(著) 小泉潤二(編訳)『解釈人類学と反=反相対主義』みすず書房。

[論文・分担執筆・共著など]

1998 「文化の解釈: 合意 について」岩波講座『文化人類学 第13巻 文化という課題』岩波書店, 175-203.

2006 Etnicidad y Estado nacional en Huehuetenango, Guatemala: el resultado de las elecciones y el problema del nacionalismo comunal, *El mundo maya: miradas japonesas*, K.Ochiai, ed., 157-77. UACSHUM (Unidad Académica de Ciencias Sociales y Humanidades), México.

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

2007 「『実践的研究』：概念と意味」小泉潤二・志水宏吉（編）『実践的研究のすすめ：人間科学のリアリティ』有斐閣, 2-11.

2008 「フィールドワーク」「象徴人類学と解釈人類学」「世界の人類学」「文化の型」「医療人類学」ほか計10章 山下晋司・船曳建夫（編）『文化人類学キーワード [改訂版]』有斐閣.

2008 小泉潤二・藤田昌久「開発戦略と人間の安全保障」『学術の動向』（2月号）：55-60.

[その他]

2007 「『実践的研究のすすめ』と実践」『書齋の窓』（569）：39-43.

口頭発表

2007年10月4日～5日 Human Security, Global Collaboration Center, and Conflict Studies in the Humanities. The International Development Studies Conference on Mainstreaming Human Security: The Asian Contribution. (Chulalongkorn University, Bangkok)

2008年3月12日～14日 Human Security and Interpretive Approach. 国際会議「グローバルイゼーション、差異、人間の安全保障 (Globalization, Difference and Human Security)」(大阪大学)

社会活動・センター外活動

日本学会会議・連携会員（第一部）(2005～)

公益法人日本国際教育支援協会・理事（2007～）

人間文化研究機構国立民族学博物館・運営会議委員（2004～；運営協議会委員2000～04）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・運営諮問委員会委員（2007～）

神戸大学国際文化学部・外部評価委員（2007）

財団法人野村国際文化財団・選考委員（2005～）

人類学会世界協議会（WCAA：World Council of Anthropological Associations）・会長（2008～；代表幹事2005～08）

日本文化人類学会・評議員（理事・評議員1992～94, 1996～98, 2002～2006, 2008～）

グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」・拠点リーダー（2007～）

科学研究費補助金基盤研究（B）「境界の生産性とトランスナショナルリティに関する文化人類学的研究」・研究代表者（2005～）

Board of Editors, *American Anthropologist*. (2008～)

Board of Editors, *Collaborative Anthropologies*. (2007～)

草郷孝好 (くさごう たかよし)

-----副センター長、准教授 (実践支援部門)

【学歴】東京大学経済学部経済学科卒 (1986)、スタンフォード大学大学院修士課程開発経済学 (フードリサーチ) 専攻修了 (1992)、ウィスコンシン大学マディソン校大学院博士課程開発学専攻修了 (1996) 【職歴】東亜燃料株式会社 (現東燃ゼネラル石油株式会社) (1986-1989)、社団法人海外コンサルティング企業協会開発研究所 (1989-1991)、世界銀行人的資本開発局社会保障部 (1997-1998)、明治学院大学国際学部助教授 (1998-2000)、北海道大学大学院経済学研究科助教授 (2000-2005)、国連開発計画開発政策局上級貧困削減政策アジア太平洋地域アドバイザー (2001-2003)、大阪大学大学院人間科学研究科助教授 (2005-2007)、大阪大学大学院人間科学研究科准教授 (2007)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授 (2007) 【学位】開発学博士 (ウィスコンシン大学マディソン校 1996) 【専攻・専門】開発学、包括的生活調査手法、発展指標研究、能力発展研究

【主要業績】

[論文・分担執筆・共著など]

- 1996 *Female Migration to Export Processing Zones in Malaysia: The Role of Preference Heterogeneity and Intra-Household Power Relations in Family Decision-Making*. Ph.D. Thesis, University of Wisconsin-Madison, USA.
- 2001 Kusago, T. and Barham, B., Preference Heterogeneity, Power, and Intra-household Decision-Making in Rural Malaysia. *World Development* 29(7): 1237-56.
- 2002 Regional Disparity in Accessibility to Non-Farm Economic Involvement Among Rural Indonesian Households. *ASEAN Economic Bulletin* 19(3): 290-301.
- 2006 Women's Empowerment Through Workers Collectives and Cooperatives in Japan: Sapporo Women's Workers Collectives Case Study. *A Gender Agenda: Asia-Europe Dialogue 3: Economic Empowerment for Gender Equality*, ed. by Chia Siow Yue, 47-75. Singapore: Asia-Europe Foundation.
- 2007 Rethinking of Economic Growth and Life Satisfaction in Post-WWII Japan? A Fresh Approach. *Social Indicators Research* 81(1): 79-102.

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

- 2007 Tashi Choden, Kusago, Takayoshi, Kokoro Shirai, *Gross National Happiness and Material Welfare in Bhutan and Japan*. Centre for Bhutan Studies. 1-220.
- 2007 「アクション・リサーチ」小泉潤二・志水宏吉 (編) 『実践的研究のすすめ』有斐閣 251-66.

2007 「第 III 部特別寄稿第 1 章 21 世紀の豊かな共生社会の担い手づくり」『総合学科の挑戦』
学事出版, 116-26.

その他 (雑誌記事)

2008 「フィールド調査余話」『経友』東京大学経友会, 151-56.

[研究報告]

2007 「第 4 章第 2 節地域コミュニティの持続的発展指標の形成と実際」『地域の「創造力」向
上を目指した再生のあり方』NIRA 助成研究報告書 0751, 249-70.

講演・口頭発表

2007年6月5日 Gross National Happiness and Material Welfare in Bhutan and Japan. (口頭
発表と討論) International Seminar, Centre for Bhutan Studies (Thimpu, Bhutan)

2007 年 6 月 29 日 ~ 7 月 1 日 Measuring Economic Empowerment of Women: A Case of the
Sapporo Women's Workers Collectives in Japan. Session 6G: Applying Feminist
Analysis, 16th Annual IAFFE Conference on Feminist Economics (Ramkhamhaeng
University, Bangkok)

2007 年 7 月 17 日 Plenary Session on "Happiness and Public Policy." (招待講演)
International Conference on Happiness and Public Policy (UNCC, Bangkok)

2007 年 9 月 13 日 Whither Nepalese Education and Skill Development (co-author: Kamal
Phuyal)? Education, Skills and Sustainable Growth, Session 8: National Policies and
Practices for Education, Skills and Sustainable Growth: Asia, UKFIET (Oxford
University)

2007 年 9 月 20 日 Satisfaction and Happiness of Persons with Disabilities (PWDs): A
Livelihood Study of PWDs in a Rural Village in Viet Nam (co-author: Nguyen Van
Chinh). HDCA 2007 (New School, New York)

2007 年 11 月 2 日 Economic Growth and Life Satisfaction in Japan: What One Can Learn
from the Japanese Experience? (招待発表) Session C : Humanities and Social Science
at the 2nd Thai-Japanese Students' Academic Exchange Meeting (Osaka University)

2007 年 11 月 2 日 Plenary Session on His Majesty's Philosophy of Sufficiency Economy in
Research for Sustainable Development at the 2nd Thai-Japanese Students' Academic
Exchange Meeting (基調講演およびセッションチェア) (Osaka University)

2007 年 11 月 27 日 What Different Measures Can Tell Us About "Local Development" in
Japan? Session III-1. Alternative Wellbeing Indexes, The 3rd International
Conference on Gross National Happiness (Chulalongkorn University, Bangkok)

2007 年 11 月 28 日 Global Standards, Local Diversity: Are Alternative Indexes Turning the
World Upside Down? (全体討論パネリスト) The 3rd International Conference on
Gross National Happiness (Chulalongkorn University, Bangkok)

- 2007年12月18日 国際コンファレンス「希望と社会の新たな地平へ」(全体討論パネリスト)
 東京大学社会科学研究所希望学プロジェクト(国際文化会館)
- 2008年1月30日 「ブータンと日本における主観的幸福: Gross National Happiness を中心に」第31回国際開発学会関西支部研究会(大阪大学)
- 2008年2月11日 Paneslist for an International Synmposium on Human Security and the Future of International Public Policy (Osaka University)
- 2008年2月15日 Experience of Minamata: Community Revitalization and Environmental Restoration. (基調講演) The 4th JF Fellow Seminar 2008 (Chulalongkorn University)
- 2008年2月27日 「繁栄と幸福に関する開発研究: ブータン王国などの事例から」(招待講演)
 京都大学グローバルCOE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」主催講演会
 (京都大学)
- 2008年2月28日 「ブータンのGNHと第3回GNH国際会議の報告」(招待発表) 持続可能な社会指標を考えるシンポジウム(財)地球・人間環境フォーラム(東京)

教育活動

- 大阪大学人間科学研究科・グローバル人間学講座・兼任
 大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究機構・兼任
 北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター・研究員
 関西学院大学社会学部・非常勤講師

社会活動・センター外活動

- 財団法人とよなか国際交流協会・評議員
 特定非営利活動法人開発と未来工房・理事
 Habitat Japan 大阪アフィリエイト委員会・委員
 Editorial Committee, *International Journal of Multiple Research Approaches*.
 Editorial Committee, *Labour and Management in Development Journal*.

海外調査活動

- 2007年6月28日~7月2日(タイ)IAFFE 国際学会参加と発表
 2007年7月17日~21日(タイ)タイ政府公共政策開発局主催国際会議
 2007年9月11日~22日(イギリス・アメリカ)国際教育開発会議、HDCA 国際学会
 2007年9月24日~28日(ベトナム社会主義共和国)ベトナムの障害者と開発セミナー共催
 2007年11月22日~29日(タイ)第3回GNH国際会議
 2007年12月19日~31日(ネパール)フィールドワーク: 教育と開発事例
 2008年2月13日~21日(ベトナム社会主義共和国)水保再生セミナー、フィールドワーク:
 障害者生活実態調査
 2008年3月1日~10日(タイ)JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・
 ディベロップメント」セミナー 2次研修

峯 陽一（みね よういち）

-----副センター長、准教授（研究推進部門）

【学歴】京都大学文学部史学科卒（1987）同大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学（1993）

【職歴】中部大学国際関係学部専任講師（1993-6）中部大学国際関係学部助教授（1996-2002）南
アフリカ共和国ステレンボッシュ大学政治学科助教授(Associate Professor, Department of Political
Science, University of Stellenbosch)（1998-2000）中部大学国際関係学部教授（2002-2006）大阪
大学大学院人間科学研究科助教授（2006）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員助
教授（2006）大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授（2007）京都大学大学院アジア・
アフリカ地域研究研究科客員教授（2007）【学位】京都大学経済学修士（1989）【専攻・専門】開発経
済学、アフリカ地域研究、人間の安全保障研究

【主要業績】

[単著]

1996 『南アフリカ：「虹の国」への歩み』岩波新書。

1999 『現代アフリカと開発経済学：市場経済の荒波のなかで』日本評論社。（第4回国際開発
研究大来賞受賞）

[編著書]

2000 『憎悪から和解へ：地域紛争を考える』京都大学学術出版会。（第2回NIRA大来政策研
究賞受賞）

[論文・分担執筆・共著など]

1993 「南アフリカ都市労働市場論：リッカート委員会報告をめぐって」『大阪外大スワヒリ&
アフリカ研究』(2): 122-79.（日本アフリカ学会第5回研究奨励賞受賞）

2006 The Political Element in the Works of W. Arthur Lewis: The 1954 Lewis Model and
African Development. *The Developing Economies* 44(3): 329-55.

[翻訳]

2002 シンディウエ・マゴナ（著）『母から母へ』（Sindiwe Magona, *Mother to Mother*, Cape
Town: David Philip, 1998）現代企画室。（NHK-FMのラジオドラマが第43回ギャラク
シー奨励賞ラジオ部門受賞）

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

2007 「アマルティア・センと人間の安全保障」絵所秀紀（監修）・国際協力機構（JICA）（編）
『人間の安全保障：貧困削減の新しい視点』国際協力出版会, 35-48.

2007 Downside Risks and Human Security. *Protecting Human Security in a Post 9/11
World: Critical and Global Insights*, ed. by Giorgio Shani, Makoto Sato and Mustapha
Kamal Pasha, 64-79. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

[書評]

2007 Robert T. Tignor, *W. Arthur Lewis and the Birth of Development Economics. The Developing Economies* 45(2): 238-241.

講演・口頭発表

2007年8月30日～31日 Migration Regimes and the Politics of Insiders / Outsiders: Japan and South Africa as Distant Mirrors. International Migration, Multi-Local Livelihoods and Human Security. (ISS, The Hague, Netherlands)

2007年9月7日 Human Security: Bounds of Possibility. (招待講演) 持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2007「国際開発協力」(日本学術会議講堂)

2007年10月5日 A Roundtable Speech. The International Development Studies Conference on Mainstreaming Human Security: The Asian Contribution. (Chulalongkorn University, Bangkok)

2008年3月12日～14日 Human Security: A Conceptual Exploration. Human Security and Interpretive Approach. 国際会議「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障 (Globalization, Difference and Human Security)」(大阪大学)

教育活動

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻・兼任

関西大学大学院経済学研究科・非常勤講師

東京外国語大学・非常勤講師

社会活動・センター外活動

国際協力機構 (JICA) 国際協力総合研修所調査研究懇談会・委員 (第2次)

日本アフリカ学会・評議員

ヒューマンセキュリティ・サイエンス学会・理事・副会長

Advisory Board Member, *African Study Monographs*. The Center for African Area Studies, Kyoto University.

海外調査活動

2007年7月27日～8月19日 (南アフリカ・モザンビーク) アフリカ紛争後の課題現地調査

2007年8月28日～9月3日 (オランダ) 人間の安全保障と人口移動に関する国際会議

2007年10月3日～6日 (タイ) 人間の安全保障に関する国際会議

2007年12月5日～7日 (ラオス) JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー フォローアップ

2008年3月1日～10日 (タイ) JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー 2次研修

津田 守(つだ まもる)

-----教授(教育開発部門)

【学歴】青山学院大学文学部教育学科文学士号取得卒業(1970)、東京大学教育学部大学院研究生(1970-1971)、フィリピン大学文理系大学院社会学取得修了(1977)、オーストラリア国立大学太平洋研究所大学院(政治社会変動学科)博士課程(1979)、オーストラリア国立大学太平洋研究所大学院(政治社会変動学科)博士課程中退(1982)【職歴】フィリピン大学文理系学部社会学科・政治学科講師(1976-1979)、フィリピン大学法学部法学研究所主任研究員(1977-1978)、アジア経済研究所フィリピン専門員(1982-1983)、四国学院大学文学部社会学科専任講師(1983-1985)、大阪外国語大学外国語学部助教授採用(1985)、大阪外国語大学大学院言語社会研究科担当(1988)、大阪外国語大学外国語学部および同大学院言語社会研究科教授(1998)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター教授(2007)【学位】M.A.(フィリピン大学1977)【専攻・専門】フィリピン社会研究、通訳翻訳学、多言語・多文化社会論

【主要業績】

[報告書]

- 2002 『国際移民労働者をめぐる国家・市民社会・エスニシティーの比較研究： 経済危機の中のアジア諸国における出稼ぎフィリピン人を素材にして (*Filipino Diaspora in Asia: Social and Personal Networks, Organizing, Empowerment, Ethnicity, and Culture*)』平成11-13年度科学研究費成果報告書、大阪外国語大学。
- 2002 『スウェーデンにおける通訳人・翻訳人の国家認定制度とその運用について：比較司法通訳研究・スウェーデン編』受託調査研究の法務省大臣官房司法法制部への報告書。
- 2005 『世界の大学大学院における通訳翻訳学プログラム』大阪外国語大学。
- 2007 『世界の大学大学院における通訳翻訳学プログラム 続』大阪外国語大学。

[編著書]

- 2003 *Filipino Diaspora: Demography, Social Networks, Empowerment and Culture*. Quezon City: Philippine Migration Research Network (PMRN) and Philippine Social Science Council.

[論文・分担執筆・共著など]

- 2003 The Right to Interpretation and Japan's Criminal Justice System: A Critical Evaluation. *Traducteurs et Interpretes Certifies et Judiciaires: Droits, Devoirs et Besoins*, ed. by Elena de la Fuente, 79-83. Paris: Federation Internationale des Traducteurs.
- 2005 「司法通訳翻訳」『在日フィリピン人の言語使用』『辞典 多言語社会日本』岩波書店, 79-82; 227-28.

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

2007 『世界の大学大学院における通訳翻訳学プログラム 続』大阪外国語大学, 119

2007 「スウェーデンの通訳人及び翻訳人公認制度についての研究」『通訳研究』日本通訳学会, No.7, 167-87

講演・口頭発表

2007年12月27日 「日本における通訳翻訳について」文藻外国語学院大学日本語学科・翻訳学科(台湾)

2007年12月28日 「日本における司法通訳翻訳について」輔仁大学大学院翻訳学研究所(台湾)

教育活動

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻・兼任

大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻・兼任

同通訳翻訳学専修コース・代表

大阪大学外国語学部地域文化学科・兼任

社会活動・センター外活動

ミリアム・カレッジ大学院(フィリピン共和国ケソン・シティ)移民学研究科および女性学・ジェンダー学研究科客員教授として講義・講演

フェリス女学院大学国際交流学部「アジアの平和と女性」の特別講師として講義

全国市町村国際文化研修所(滋賀県大津市)における講義

大阪高等裁判所、大阪地方裁判所、神戸地方裁判所、奈良地方裁判所、神戸地方検察庁、大阪弁護士会などで(フィリピン語および英語)司法通訳翻訳業務

日本通訳学会第8回年次大会・実行委員長

海外調査活動

2007年12月26日~30日(台湾)台湾通訳学会参加、輔仁大学大学院・長英大学・文藻大学訪問

宮本和久 (みやもと かずひさ)

-----特任教授 (研究推進部門)

【学歴】京都大学工学部化学機械学科卒業 (1965)、京都大学大学院工学研究科 (化学工学専攻修士課程) 修了 (1967) 【職歴】大阪大学薬学部助手 (1967)、米国カリフォルニア大学客員研究員 (1977-1979)、大阪大学薬学部助教授 (1983)、米国ジョージア工科大学客員研究員 (1987-1987)、大阪大学薬学部教授 (1992)、大阪大学大学院薬学研究科教授 (1998)、大阪大学評議員 (1999-2001)、薬学研究科長・薬学部長 (2001-2003)、大阪大学定年退職 (2005)、大阪大学名誉教授 (2005)、大阪大学生物工学国際交流センター特任教授 (バンコク駐在) (2005)、大阪大学バンコク教育研究センター長・特任教授 (2006)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任教授 (2007) 【学位】工学修士 (京都大学 1967)、工学博士 (大阪大学 1978) 【専攻・専門】環境バイオテクノロジー、環境系薬学、微細藻類の大量培養、微細藻類による環境浄化、熱帯生物資源を用いたバイオ燃料の開発

【主要業績】

[編著書]

1997 Renewable Biological Systems for Alternative Sustainable Energy Production. *FAO Agricultural Services Bulletin*. Food and Agriculture Organization of the United Nation.

[論文・分担執筆・共著など]

- 1998 平田收正・宮本和久「有用植物の開発と耐性植物の創出」遠藤他 (編) 『沙漠工学』森北出版, 158-64.
- 2000 宮本和久・藏野憲秀「微細藻類による CO₂ 固定」乾智行 (監修) 『CO₂ 対策の最新技術』シーエムシー, 31-43.
- 2001 Ike, A., H. Kawaguchi, K. Hirata, and K. Miyamoto, Hydrogen Photoproduction from Starch in Algal Biomass. *BIOHYDROGEN II*, ed. by J. Miyake et al., 53-61. Amsterdam: PERGAMON.
- 2001 Miyamoto, K., H. Nagase, K. Hirata, Microbial Biotechnology for Clean Environments: Simultaneous Removal of CO₂ and NO_x by Microalgal Culture. *Photosynthetic Microorganisms in Environmental Biotechnology*, ed. by H. Kojima, and Y.K. Lee, 87-96. Hong Kong: Springer-Verlag.
- 2002 宮本和久・永瀬裕康・平田收正「排ガス中の窒素酸化物の除去」今中忠行 (監修) 『微生物利用の大展開』エヌ・ティー・エス, 876-80.

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

2007 Ando, T., H. Nagase, K. Eguchi, K. Hirooka, T. Nakamura, K. Miyamoto and K. Hirata, A Novel Method Using Cyanobacteria for Ecotoxicity of Veterinary Antimicrobial Agents. *Environ. Toxicol. Chem.* 26: 601-06.

2007 Somrak Rodjaroen, Niran Juntawong, Aparat Mahakhant, Kazuhisa Miyamoto and Kasetsart J., High Biomass Production and Starch Accumulation in Native Green Algal Strains and Cyanobacterial Strains in Thailand. *Nat. Sci.* 41: 570-75.

[その他（総説）]

2007 平田收正・宮本和久「微生物共生系による余剰バイオマス为原料とする水素生産」『生物工学』85: 212-14.

口頭発表

2007年10月26日「環境バイオテクノロジーで地球を救う」ライフサイエンス・セミナーIN 彩都（彩都バイオヒルズセンター）

2007年11月22日「微細藻類の大量培養について」多良間島におけるバイオマス利活用システム導入に係わる講演会（おきでん那覇ビル）

海外調査活動

2007年10月17日～25日（タイ）タイ・ピピ島における燃料電池を用いたバイオマス発電システムの事業調査

2008年1月19日～27日（タイ）バイオマス为原料とする燃料電池の海外普及に関する調査

2008年3月4日～13日（インドネシア、タイ）インドネシアおよびタイにおけるバイオ燃料研究開発の現状調査

辻 毅一郎 (つじ きいちろう)

-----前特任教授 (2007.04-08) (教育開発部門)

【学歴】大阪大学工学部電気工学科卒業 (1966) 大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻修士課程修了 (1968) ケースウェスタンリザーブ大学大学院工学研究科システム工学専攻博士課程修了 (1973)

【職歴】大阪大学工学部電気工学科助手 (1973) 国際応用システム解析研究所研究員 (1979-1980) 大阪大学工学部一般電気工学講座講師 (1981) 大阪大学工学部一般電気工学講座助教授 (1984) 大阪大学工学部一般電気工学講座教授 (1988) 大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻教授 (1998) 大阪大学超伝導エレクトロニクス研究センター長 (1998-2000) 大阪大学超伝導フォトンクス研究センター長 (2000-2004) 大阪大学評議員 (2003-2004) 大阪大学留学生センター長 (2004-2006) 大阪大学教育・情報室員 (2004-2007) 大阪大学総長補佐 (2005-2007) 大阪大学名誉教授 (2007) グローバルコラボレーションセンター特任教授 (2007) 大阪大学理事 (2007) 【学位】博士 (米国ケースウェスタンリザーブ大学 1973) 【専攻・専門】電力・エネルギーシステム工学、環境負荷低減を旨とした都市エネルギーシステム

【主要業績】

[査読付き原著論文]

- 2003 杉原英治・河本純・辻毅一郎「地域特定型総合エネルギーサービスにおける都市エネルギーシステムの多目的最適化モデルの開発」『電気学会論文誌 B』123(2):151-61
- 2003 佐野史典・鈴東新・上野剛・佐伯修・辻毅一郎「住宅用用途別エネルギー消費日負荷曲線の推定：関西文化学術研究都市における計測調査報告 (その1)」『エネルギー・資源』24(5):347-353
- 2003 佐野史典・上野剛・佐伯修・辻毅一郎「住宅における用途別エネルギー消費構造と暖房需要の省エネポテンシャル：関西文化学術研究都市における計測調査報告 (その2)」『エネルギー・資源』24(5):354-60
- 2004 Kiichiro Tsuji, Fuminori Sano, Tsuyoshi Ueno, Osamu Saeki and Takehiko Matsuoka, Bottom-up Simulation Model for Estimating End-Use Energy Demand Profiles in Residential Houses, American Council for an Energy-Efficient Economy (ACEEE) Summer Study on Energy Efficiency in Buildings, 2:342-55
- 2005 上野剛・稲田亮・佐伯修・辻毅一郎「住宅用エネルギー消費情報提供システムによる省エネルギー：世帯全体のエネルギー消費に対する効果」『エネルギー・資源』26(2):139-45
- 2006 国吉ニルソン・芦沢真五・辻毅一郎「大阪大学大学院工学研究科における米国夏期研修プログラムの効果と課題」『工学教育』54(3):105-11

[著書・訳書]

- 1990 「第12章 公共交通システムの選択」刀根・眞鍋 (編) 『AHP 事例集』日科技連。
- 2001 「エネルギー環境学」窪川・西川・辻共 (編著), オーム社。

[解説・総説]

2003 「家庭におけるエネルギー消費の実測とその動向」『電気学会誌』123(6):354-57

2005 「工学系夏季語学研修プログラムを企画して」『生産と技術』57(2):66-69

【2007年度の活動報告】

出版業績

[解説]

2007 杉原英治・辻 毅一郎「都市における省エネルギー」『電気学会誌』127(4): 218-21.

[国際会議 (proceedings あり)]

2007年7月 Yuko Omagari, Hideharu Sugihara, Ken Furusawa and Kiichiro Tsuji, An Economic Evaluation of Thermal Storage-Type Air-Conditioning Systems in Consideration of Electricity Market Price.

2007年11月 Hideharu Sugihara and Kiichiro Tsuji, An Evaluating Model for Load Variations Generated by Photovoltaic Systems in An Urban Energy System Planning. Songpakit Kaewniyompanit.

住村欣範 (すみむら よしのり)

-----准教授 (教育開発部門)

【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒業 (1991)、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了 (1996)、ハノイ国家大学ベトナム研究文化交流センター留学 (1997-1999、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学 (2000)、放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了 (2008)

【職歴】帝塚山大学短期大学部非常勤講師 (2000-2001)、大阪外国語大学外国語学部専任講師 (2000-2003)、関西大学社会学部・第二部非常勤講師 (2002-2003)、大阪外国語大学外国語学部助教授・准教授 (2004-2007)、東京外国語大学外国語学部非常勤講師 (2004)、大阪市立大学大学院文学研究科非常勤講師 (2007)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授、同大学院人間科学研究科兼任 (2007)【学位】人間科学修士 (大阪大学 1996)【専攻・専門】文化人類学、ベトナムにおける知識、身体、記憶

【主要業績】

[論文・分担執筆・共著など]

2007 「ベトナムにおける戦争の記憶とトラウマ」 松野明久・大阪外国語大学グローバルダイアログ研究会 (編)『トラウマ的記憶の社会史：抑圧の歴史を生きる民衆の物語』明石書店, 52-68.

2006 「ベトナムにおける植物性食品の利用と『健康』: 食と医の間」『大阪外国語大学論集』35: 129-44.

【2007 年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

2007 「ベトナムにおける戦争の記憶とトラウマ」松野明久・大阪外国語大学グローバルダイアログ研究会(編)『トラウマ的記憶の社会史: 抑圧の歴史を生きた民衆の物語』明石書店, pp.52-68.

[翻訳]

2007 「ベトナムにおける機能性食品の研究・生産・消費の状況」『大阪外国語大学論集』36: 84-90.

2007 「ベトナムにおける栄養 2010 年に向けて: 成果と課題」『大阪外国語大学論集』36: 77-83.

[その他]

2007 「資料 ドイモイ後のベトナムにおける食の問題」『大阪外国語大学論集』36: 75-76.

口頭発表

2008 年 2 月 15 日 「食の転換期を迎えたベトナムにおける文理協働型の共同研究の可能性について」文理融合研究戦略ワーキング(大阪大学)

2008 年 1 月 25 日 「ベトナムにおける自然と文化」兵庫県阪神シニアカレッジ(国際交流学科)(尼崎中小企業センター)

教育活動

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻・兼任

大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻・兼任

大阪大学外国語学部地域文化学科・兼任

大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学専修・非常勤講師

社会活動・センター外活動

科学研究費基盤研究 A 「着衣する身体と女性の周縁化」・研究分担者

二国間交流事業(ベトナム VAST との交流)「越日・日越電子辞典の編纂とその公開のための共同研究」・研究分担者

海外調査活動

2007 年 8 月 6 日~26 日(ベトナム)「着衣する身体と女性の周縁化」(平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究費 A)に関する現地調査;「ベトナムの伝統的食の合理性の継承と向上」(ベトナム国立栄養院・ベトナム栄養学会主催,ベトナム社会科学院民間文化研究所共催)に関するシンポジウム参加、およびこれに関連する現地視察

2007 年 12 月 23 日~31 日(ベトナム)「Ninh Binh 省の一社における栄養状況とそれに関連する諸要因」に関する予備調査および研究打ち合わせ

2008年2月26日～3月9日（ベトナム）「Ninh Binh 省の一社における栄養状況とそれに関連する諸要因」に関する調査実施；「家庭果菜園を利用した栄養ケアとフードセキュリティのモデル構築のための共同研究」のための予備調査および研究打ち合わせ；35th Annual Session (Hanoi), United Nations System Standing Committee on Nutrition に参加。

宮原 暁（みやはら ぎょう）

-----准教授（研究推進部門）

【学歴】大阪外国語大学外国語学部インドネシア・フィリピン語学科卒業（1989）東京都立大学大学院社会科学部研究科修士課程（社会人類学専攻）修了（1992）東京都立大学大学院社会科学部研究科博士課程（社会人類学専攻）中退（1997）【職歴】大阪外国語大学アジア 講座専任講師（1997）大阪外国語大学アジア 講座助教授（1999-2007）大阪外国語大学アジア 講座准教授（2007）大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授（2007）【学位】文学修士（東京都立大学）博士（社会人類学、東京都立大学）【専攻・専門】社会人類学、華僑華人研究

【主要業績】

[編著書]

1994 E・エイハン（著）植野弘子・宮原暁（共訳）「台湾村落における墓の風水：ある漢族村落における死者儀礼」渡邊欣雄・三浦國雄（編）『風水論集』凱風社, 476-93.

2004 「飛び入りの現象学：フィリピンの『華僑の宴会』』『アジア遊学』(60):81-90.

[論文・分担執筆・共著など]

2006 紀宝坤・宮原暁「中国の台頭と日中関係」『現代中国研究』(18): 47-61.

2003 「戦前日本の華僑観と『他者』認識：『血』と『地』をめぐって」『アジア文化研究所論集』(4): 9-25.

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

2008 Miyabara, Gyo and Jimenez, Ito, Soil to be Repatriated: An Aspect of the Biopolitics of Chinese in the Philippines. *Cultural Encounters between People of Chinese Origin and Local People: Case Studies from the Philippines and Vietnam*, ed. by Yuko Mio, 1-22. Tokyo: Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

2008 「閉じられた身体とクレオールとの身体の間：フィリピン・セブにおける中国系住民の身体
のポリテクスと東アジア地域研究」西村成雄・許衛東（編）『現代中国の社会変容と国
際関係』汲古書院, 205-22.

2008 「『死』を文化化する：韓国と香港・東南アジア華人社会における死者の着衣」

口頭発表

2007 年 8 月 26 日～30 日 「隠喩としての身体と「中国人」像：フィリピン華人研究における
生政治的解釈モデルの可能性」国際セミナー「現代"中国"の社会変容と東アジアの新環境」
（南開大学 中華人民共和国）

2007 年 11 月 17 日 「閉じられた身体とクレオールとの身体のあいだ：フィリピン・セブにお
けるチャイニーズのアイデンティティをめぐって」日本華僑華人学会（慶應義塾大学）

2008 年 3 月 9 日 「帰るべき場所：フィリピンの中国系住民と『中国』」大阪大学中国文化フォ
ーラム第 1 回セミナー「現代中国学の新たなプラットフォーム」（大阪大学）

社会活動・センター外活動

日本華僑華人学会・理事、編集室長、選挙管理委員、研究大会大会委員長（11 月から）、企画委
員（11 月から）

地域研究コンソーシアム・運営委員

海外調査活動

2008 年 1 月 31 日～2 月 3 日（フィリピン共和国）JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保
障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー フォローアップ

石井正子（いしい まさこ）

-----特任准教授（研究推進部門）

【学歴】上智大学外国語学部英語学卒業（1991）、英国サセックス大学ヨーロッパ学科国際関係論M
A取得（1992）、フィリピン共和国アテネオ・デ・マニラ大学客員研究員（1994-1996）、上智大学国
際関係論専攻・博士後期課程満期修了（1997）、上智大学外国語学研究科博士（国際関係論）取得（2000）

【職歴】国立民族学博物館・地域研究企画交流センター・中核的研究機関研究員（1997-2000）、国立民
族学博物館・地域研究企画交流センター・日本学術振興会特別研究員（2000-2002）、国立民族学博物館・
地域研究企画交流センター助手（2002-2006）、京都大学地域研究統合情報センター助手（2006-2007）、
大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2007）【学位】修士（国際関係論）（サセ
ックス大学 1992）、博士（国際関係論）（上智大学 2000）【専攻・専門】東南アジア研究、フィリピン
研究、紛争研究、ジェンダー研究、ムスリム社会研究

【主要業績】

[単著]

- 2002 『女性が語るフィリピンのムスリム社会：紛争・開発・社会的変容』明石書店。（第6回財団法人 国際開発高等教育機構（FASID）国際開発研究大来賞 受賞）

[編著書]

- 2004 Ishii, Masako, and Jacqueline A. Siapno, eds., *Between Knowledge and Commitment: Post-Conflict Peace-Building and Reconstruction in Regional Contexts*. JCAS Symposium Series 21. The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.

[論文・分担執筆・共著など]

- 2005 「紛争地域の復興・開発支援：地域研究から考える」『地域研究』7(1): 47-68.
 2005 「中東へ出稼ぎに行くフィリピンのムスリム女性：変わる「性」規範と移動する女性」加藤博（編）『イスラームの性と文化』（イスラーム地域研究叢書）東京大学出版会, 185-210.
 2004 「女性の紛争経験へのアプローチ：フィリピン南部を事例として」高柳彰夫・ロニー・アレキサンダー（編）『私たちの平和をつくる：環境・開発・人権・ジェンダー』法律文化社, 191-216.

【2007年度の活動報告】

口頭発表

- 2007年5月26日 「フィリピンの女性労働」東南アジア学会中部例会（名古屋大学）
 2007年12月15日 「フィリピン南部の紛争と人権侵害」文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障：第3回ワークショップ」（大阪大学）

社会活動・センター外活動

- 科学研究費基盤研究A「ポスト・グローバル化時代の現代社会」・研究分担者
 科学研究費基盤研究B「イスラーム教圏東南アジアにおける学知の制度化と実践」・研究分担者
 文部科学省委託事業 世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業「人道支援に対する地域研究からの国際協力と評価：被災社会との共生を実現する復興・開発をめざして」データベース構築班リーダー

- トヨタ財団研究助成プロジェクト「フィリピン南部イスラーム教圏における平和と開発に関する記録」・研究参加者

東南アジア学会・大会委員

名古屋大学・客員研究員（2007年4月1日～5月31日）

地域研究コンソーシアム・運営委員

海外調査活動

- 2007年7月24日～8月5日（東ティモール）復興・開発支援に関する調査

- 2007年9月14日～29日（フィリピン）フィリピン南部の武力紛争と人権侵害に関するフィールド調査
- 2007年11月18日～12月3日（フィリピン）フィリピンの女性労働政策に関する調査
- 2008年2月20日～3月6日（フィリピン）フィリピン南部の武力紛争と人権侵害に関するフィールド調査
- 2008年3月11日～16日（レバノン）パレスチナ映画会議出席

上田晶子（うえだ あきこ）

-----特任准教授（実践支援部門）

【学歴】学習院大学法学部政治学科卒業（1993）、ランカスター大学、国際関係学大学院ディプロマ課程修了（1994）、ロンドン大学東洋アフリカ学院、開発学修士課程修了（1995）、ロンドン大学東洋アフリカ学院、開発学博士課程修了（2001）【職歴】在インド日本国大使館専門調査員（2001-2004）、国連開発計画ブータン事務所、コーディネーションオフィサー（2004-2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授（2007）【学位】開発学博士（ロンドン大学2001）【専攻・専門】開発研究、開発の言説、食糧安全保障、援助

【主要業績】

[単書]

- 2006 上田晶子『ブータンにみる開発の概念：若者たちにとっての近代化と伝統文化』明石書店。
- 2003 *Culture and Modernisation: From the Perspectives of Young People in Bhutan*.
Thimphu: Centre for Bhutan Studies.

[論文・分担執筆・共著など]

- 2004 Education System and the 'Ladder of Success'. *The Spider and the Piglet*, ed. by Karma Ura and Sonam Kinga, 327-48. Thimphu: Centre for Bhutan Studies.

【2007年度の活動報告】

海外調査

- 2007年12月5日～19日（ラオス）JICA 研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティー・ディベロップメント」のフォローアップと食糧安全保障に関するフィールド調査
- 2008年1月25日～2月18日（イギリス）食糧安全保障に関する研究者・実務家との意見交換と文献調査
- 2008年3月3日～11日（タイ）JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティー・ディベロップメント」セミナー 2次研修

中川 理 (なかがわ おさむ)

-----特任講師 (教育開発部門)

【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒業 (1995) 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了 (1997) プロヴァンス大学 (エクス - マルセイユ第一大学) 人類学科 DEA 課程入学 (1999-2000) 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学 (2003) 【職歴】天理大学非常勤講師 (2002) 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2003-2005) 大阪大学大学院人間科学研究科基礎人間科学講座助手 (2005) 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任講師 (2006) 【学位】博士 (人間科学) (大阪大学 2006) 【専攻・専門】文化人類学、フランス研究

【主要業績】

[論文・分担執筆・共著など]

- 2001 「人類学研究における人格と自己」『年報人間科学』22: 191-208.
- 2002 「主体性の解釈：フランスにおける失業者のアンセルシオンの実践から」『民族学研究』67(1): 62-68.
- 2002 「植民地状況における行為：モーリス・レーナルトの人格論の扱いをめぐる」春日直樹 (編) 『オセアニア・ポストコロニアル』(太平洋世界叢書 3) 東京：国際書院, 175-216.
- 2006 『新しい社会経済的リアリティをつくる：フランスにおける地域開発の民族誌的研究』(博士論文) 平成 17 年度大阪大学大学院人間科学研究科。
- 2006 「経済人類学における『交換の枠組み』概念」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』32: 75-92.

[翻訳]

- 1999 ニコラス・トーマス (著) 「美しきものと呪われたもの：植民地文化における太平洋の構築」春日直樹 (編) 『オセアニア・オリエンタリズム』京都：世界思想社, 31-52.

【2007 年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

- 2007 「地域通貨のリアリティ：南フランスの SEL の事例から」春日直樹 (編) 『資源人類学 5：貨幣と資源』東京：弘文堂, 261-98.
- 2008 「ずれた未来を垣間見る：フランスにおける『組み込み』政策の周辺で」石塚道子・富山 一郎・田沼幸子 (共編) 『ポスト・ユートピアの人類学』京都：人文書院, 287-306.

口頭発表

- 2007 年 12 月 15 日 「総合コメント」大阪大学人間科学研究科グローバル COE プログラム「コンフリクトの人類学」シンポジウム「経済人類学の新機軸：社会に埋め込まれた経済から問い直す」(京都大学)

教育活動

天理大学国際文化学部・非常勤講師

社会活動・センター外活動

文部科学省科学研究費基盤研究(B)「境界の生産性とトランスナショナリティに関する文化人類学的研究」・研究分担者

文部科学省科学研究費若手研究(B)「フランスにおける連帯経済の生成に関する文化人類学的研究」・代表

国立民族学博物館共同研究「ソーシャル概念の再検討：ヨーロッパ人類学の問いかけ」・共同研究員

大阪大学人間科学研究科グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学」共同研究プロジェクト「諸価値のコンフリクトと妥協に関する民族誌的研究」・連携研究者

大阪大学人間科学研究科グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学」共同研究プロジェクト「「コンフリクト」を理解する理論的・方法論的な研究：人類学を中心として」・連携研究者

日本文化人類学会・編集委員

海外調査活動

2007年8月29日～9月30日(フランス)フランス南部における連帯経済(économie solidaire)の実践と言説についての調査

2008年2月24日～3月10日(フランス)フランス南部における連帯経済(économie solidaire)の実践と言説についての調査

思沁夫(すちんぷ)

-----特任助教(研究推進部門)

【学歴】内モンゴル自治区芸術学院大学卒業(1979)、中国国際政治大学第二総合学部(法律)卒業(1986)、金沢大学大学院文学研究科修士課程卒業(1998)、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士課程卒業(2002)【職歴】内モンゴル自治区法律専門学校 教師(1986-1989)、内モンゴル自治区行政幹部管理大学 講師、弁護士(1989-1993)、金沢大学特別研究員/北陸大学非常勤講師(2002-2004)、ロシア・クラスノヤルスク国立大学特別要請研究員(2004-2006)、大阪大学サステナビリティサイエンス研究機構特任研究員(2007)、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教(2007)【学位】学術博士(金沢大学)【専攻・専門】文化人類学、生態人類学、北東アジアにおける先住民の生存基盤と環境問題の研究、グローバル化とユーラシア大陸の国境・移民(移住)・地域社会に関する複合的・動態的研究

【主要業績】

[論文・分担執筆・共著など]

- 1991 思沁夫・孫継文『視点：自治地域における老人問題と老人法』内蒙古大学出版社。
- 1993 「人事自治権とのその意義」孫徳全など（編）『民族区域自治法概論』内蒙古大学出版社、167-79。（原文中国語）
- 2000 『中国トナカイエヴェンキ人社会の社会経済変化』（博士論文）金沢大学大学院社会環境科学研究科。
- 2000 「中国・内モンゴル自治区のトナカイエヴェンキ人のトナカイ飼育の現状」『リトルワールド研究報告書』16: 23-46
- 2003 「新しい民族誌の構築のために：エヴェンキ研究の同時代性」祁恵君など（編）『オロチヨン族研究』中国中央民族大学出版社、134-163。（原文中国語）
- 2004 「第一巻 エヴェンキ」未成道男など（編）『講座 ファーストピープルズ：世界先住民の現在』明石書店。

【2007年度の活動報告】

出版業績

[論文・分担執筆・共著など]

- 2007 思沁夫、バワジャブ『“旅人”の運命：20世紀初頭ブリヤード人の中国への移住とその後』内モンゴル自治区文化出版社。（原文モンゴル語）
- 2007 「伝統文化の再解釈とその戦略性：ロシア・ブリヤード共和国の事例」ブリヤード共和国科学院歴史研究所（編）『歴史と文化』3(2): 201-20。（原文ロシア語）
- 2007 「北東アジアの環境問題とは？先住民の立場から問う」中国エヴンキ研究会（編）『エヴンキ研究』12: 12-24。（原文中国語）
- 2008 「近代化的“風景”と民族の自然」内モンゴル自治区社会科学連合会（編）中国“3小”民族についてのシンポジウム論文集』23-35.
- 2008 「近代化の影：語る環境問題と生きる困難のずれ」『日中国際シンポジウム：環境と民俗 論文集』北京師範大学出版社、136-49.

[その他]

- 2007 「中国内モンゴル自治区での環境問題を調査研究」『サステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）ニュースレター』(6): 2.
- 2007 「人間の安全保障ワークショップについて」『サステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）ニュースレター』(4): 4.
- 2008 「自然環境と民俗地理学日中国際シンポジウムに参加して」『天地人』(1):12.総合地球環境学研究所。

口頭発表

2007年8月11日「仏教とモンゴルの信仰」国際シンポジウム「ロシアブリヤード共和国における寺院建設とラマ教育の課題」(モンゴル国立大学)

2007年9月22日「人間の安全保障教育コンソーシアム」北東アジア地域における環境問題と人間の安全保障について」(中部大学)

2007年10月28日「自然環境と民俗地理学」日中国際シンポジウム「“環境移民”と人間の安全保障」(北京師範大学)

教育活動

大阪大学人間科学研究科・兼任

社会活動・センター外活動

文化人類学会・会員

中国自然保全組織「自然と人」・理事

中国中央民族大学・客員研究員

モンゴル国自然保護運動(自然と川を守る)メンバーおよび特別顧問

ロシア民族学学会・会員

海外調査活動

2007年8月3日～10日(モンゴル)ウブスハンガイ県オング河の環境問題に関する実地調査

2007年8月14日～25日(中国)内モンゴル自治区シリンホト市における“生態移民”と遊牧民の生活に関する実地調査

2007年8月28日～9月4日(中国)内モンゴル自治区ホロンバイル市・エヴェンキ自治旗の市場化と“供銷社”に関する実地調査

2008年2月18日～3月8日(モンゴル)補充調査

常田夕美子(ときた ゆみこ)

-----特任助教(教育開発部門)

【学歴】英国 United World College of the Atlantic 卒業、国際バカロレア資格取得(1984)、ロンドン大学東洋アフリカ学院、日本語および言語学専攻 学士課程卒業(B.A. in Japanese and Linguistics with First Class Honours)(1987)、ロンドン大学東洋アフリカ学院、社会人類学専攻 修士課程入学(1987)、ロンドン大学東洋アフリカ学院、社会人類学専攻 修士課程修了(M.A. in Social Anthropology with Distinction)(1988)、東京大学大学院・総合文化研究科 文化人類学専攻 修士課程修了(1991)、東京大学大学院・総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学(1997)、東京大学大学院・総合文化研究科 研修員(1997-1998)、京都大学・人文科学研究所 研修員(1998-2000)、東京大学大学院・総合文化研究科 学術博士号取得(2000)【職歴】ロンドン商工会

議所 特別研究員 (1987-1988) 日本学術振興会 特別研究員 (DC) (1995-1997) 日本学術振興会 特別研究員 (PD) (1997-2000) フリーランス翻訳者 (2002-2004) 京都大学人文科学研究所 研究支援推進員 (2004-2005) 京都大学人文科学研究所 研究支援推進員 (2006-2007) 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教 (2007)【学位】学術博士 (東京大学 2000)【専攻・専門】文化人類学、南アジア地域研究、ジェンダー研究、インドにおける女性のエンパワーメント

【主要業績】

[編著書]

2003 Tokita, Yumiko, Y. Hayami and A. Tanabe, *Gender and Modernity: Perspectives from Asia and the Pacific*. Kyoto: Kyoto University Press; Melbourne: Trans Pacific Press.

[論文・分担執筆・共著など]

2006 「個的経験の共同性・単独性・歴史性：東インド・オリッサにおける初潮儀礼をめぐる」田中雅一・松田素二 (編)『ミクロ人類学の実践：エイジェンシー/ネットワーク/身体』世界思想社, 240-62.

2005 「宇宙と身体の共鳴」田中雅一・中谷文美 (編)『ジェンダーで学ぶ文化人類学』世界思想社, 76-96.

1999 Play and Eros: Girls' Swing Play and Swing Songs in Orissa, India. *Journal of Japanese Association for South Asian Studies* (11): 25-50.

1996 Village Politics and Women: Towards a Gendered Analysis of 'Faction' in Rural Orissa. *Journal of Japanese Association for South Asian Studies* (8): 90-122.

1995 「イ工相続の実践：参加と再生産をめぐる」福島真人 (編)『身体の構築学：社会的学習過程としての身体技法』ひつじ書房, 261-95.

【2007年度の活動報告】

口頭発表

2007年9月25日 「「人間の安全保障」とはなにか? : ミクロ人類学的視点から」GLOCOLスタッフ研究会 (大阪大学)

2007年12月16日 「関係性に埋め込まれる身体と解放への希求：女性の経験から」大阪大学GCOE「コンフリクトの人文学」研究会「『コンフリクト』を再理解する理論的・方法論的な研究：人類学を中心として」(大阪大学)

2008年1月6日 「超越的エロス：インド・オリッサの農村における女性と精神性 (Transcendental Eros: Women and Spirituality in Rural Orissa, India)」世界会議「心理学と精神性 (World Congress on Psychology and Spirituality)」(ニューデリー)

2008年1月9日 「身体・社会性・自由：オリッサの女性の民族誌にむけて (Body, Social-Embeddedness, Freedom: An Ethnography of Women in Orissa)」ジャワハルラー・ネルー大学女性学プログラムセミナー (Jawaharlal Nehru University Women's

Studies Programme Seminar)(ニューデリー)

2008 年 3 月 14 日 「存在論的平等性への認識にむけて：インド・オリッサにおける差異を媒介する文化資源を事例に (Recognizing Ontological Equality: Rethinking the Cultural Resources for Negotiating Differences in Orissa, India)」国際会議「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障 (Globalization, Difference and Human Security)」(大阪大学)

社会活動・センター外活動

科学研究費補助金 (若手研究 (スタートアップ)) 「現代インド地方都市の中間層女性における「理想の生き方」の模索」・代表

大阪大学人間科学研究科グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学」共同研究プロジェクト「コンフリクト」を理解する理論的・方法論的な研究：人類学を中心として」・連携研究者

海外調査活動

2007 年 8 月 1 日～25 日 (インド) インド・オリッサ州の農村女性のエンパワーメントに関するフィールド調査

2008 年 1 月 4 日～16 日 (インド) 現代インド地方都市の中間層女性における「理想の生き方」の模索に関するアンケート回収

2008 年 2 月 12 日～3 月 9 日 (インド) 現代インド地方都市の中間層女性における「理想の生き方」の模索に関するフィールド調査

ヴァージル・ホーキンス (Virgil Hawkins)

-----特任助教 (実践支援部門)

【学歴】大阪大学法学部卒業 (1997)、大阪大学大学院国際公共政策研究科修士課程修了 (1999)、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士課程修了 (2002) 【職歴】国連本部オーストラリア代表部インターン (2000)、特定非営利活動法人 AMDA カンボジアアドバイザー (2002-2004)、特定非営利活動法人 AMDA ザンビア駐在代表・アドバイザー (2004-2007)、ザンビアオープン大学非常勤講師 (2006-2007) 【学位】修士 (国際公共政策) 大阪大学 1999、博士 (国際公共政策) 大阪大学 2002 【専攻・専門】国際公共政策、紛争への対応

【主要業績】

[単著]

2004 The Silence of the UN Security Council: Conflict and Peace Enforcement in the 1990s.

Firenze: European Press Academic Publishing.

[論文・分担執筆・共著など]

2004 「国連安全保障理事会の沈黙：紛争への対応の評価」『国連ジャーナル』4:126-32.

2004 Stealth Conflicts: Africa 's World War in the DRC and International Consciousness. *Journal of Humanitarian Assistance* (online journal <http://jha.ac/articles/a126.htm>).

2003 Measuring UN Security Council Action and Inaction in the 1990s: Lessons for Africa. *African Security Review* 12(2): 61-71.

2002 The Other Side of the CNN Factor: Media and Conflict. *Journalism Studies* 3(2): 225-40.

2001 The Price of Inaction: The Media and Humanitarian Intervention. *Journal of Humanitarian Assistance* (online journal <http://jha.ac/articles/a066.htm>).

【2007年度の活動報告】

海外調査活動

2008年2月4日～13日（南アフリカ、ザンビア）研究成果発表、国際会議および紛争と平和の研究機関に関する調査

2008年3月1日～11日（タイ）JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー 2次研修

三田 貴（みた たかし）

-----特任研究員

【学歴】国際基督教大学教養学部社会科学科卒業（1994）、ハワイ大学大学院太平洋諸島地域研究科修士課程太平洋地域研究専攻入学（1998）、インターナショナル・カルチュラル・スタディーズ・サーティフィケート・プログラム修了（ハワイ大学・東西センター）（2000）、ハワイ大学大学院政治学研究科博士課程政治学専攻入学（2000）、ハワイ大学大学院太平洋諸島地域研究科修士課程太平洋地域研究専攻卒業（2001）、ハワイ大学大学院政治学研究科博士課程政治学専攻単位取得、博士候補生となる（2002）【職歴】特殊法人（現独立行政法人）国民生活センター職員（1994-1998）、在パラオ日本国大使館専門調査員（2003-2006）、パラオ・コミュニティ・カレッジ教養学部社会科学科准教授（2006-2007）、大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任研究員（2007）【学位】太平洋諸島地域研究修士（ハワイ大学2001）【専攻・専門】政治学（比較政治学、未来研究）、太平洋諸島地域研究

【主要業績】

[論文・分担執筆・共著など]

2003 「現代社会における伝統的リーダーの機能と役割」須藤健一（監修）『パラオ共和国：過

去と現在そして 21 世紀へ』おりじん書房, 564-85.

2003 「パラオの未来像」須藤健一（監修）『パラオ共和国：過去と現在そして 21 世紀へ』おりじん書房, 588-618.

2002 「パラオ共和国における日本 ODA の効果と影響：小規模漁業開発計画導入後の住民の視点より」『パシフィック ウェイ』(120): 25-34.

[資料]

2005 Mita, Maki and Takashi Mita, *Exhibit of History and Culture during Japanese Administration Period*. Koror, Palau: Belau National Museum and Embassy of Japan in the Republic of Palau.

【2007 年度の活動報告】

口頭発表

2007 年 6 月 14 日 From “Continued Growth” to “Disciplined Society”: Breaking away from Dependency on External Resources and the Possibility of self-Reliant Development in the Republic of Palau. 21st Pacific Science Congress (第 21 回太平洋学会議)(沖縄コンベンションセンター)

2007 年 10 月 5 日 Human Security and Capacity Development in Asia: A New Seminar Prepared by JICA and Osaka University. The International Development Studies Conference on Mainstreaming Human Security: The Asian Contribution. (Chulalongkorn University, Bangkok)

2007 年 10 月 15 日 Introduction to the Training Course. 平成 19 年度 JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー (JICA 大阪)

2007 年 11 月 16 日 Checkbook Diplomacy in the Pacific: China Confronts Taiwan in Palau. 明治学院大学国際学部 Pacific Island Studies 公開講座 (明治学院大学)

2008 年 3 月 3 日 「アクションリサーチ発表会」平成 19 年度 JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー ファシリテーター (チュロンコン大学)

海外調査活動

2007 年 7 月 7 日～12 日 (パラオ) パラオ共和国における未来構築に関するフィールド調査

2007 年 10 月 3 日～7 日 (タイ) 学会発表 (Mainstreaming Human Security)

2008 年 1 月 20 日～27 日 (フィリピン) 太平洋諸島に移住するフィリピン人労働者に関するフィールド調査

2008 年 3 月 1 日～11 日 (タイ) JICA 地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー 2 次研修

福田州平（ふくだ しゅうへい）

----- 特任研究員

【学歴】東海大学文学部北欧文学科卒業（1998）、東京国際大学大学院国際関係学研究科修士課程修了（2000）、中部大学大学院国際関係学研究科博士後期課程修了（2004）【職歴】中部大学リサーチアシスタント（2001-2004）、中部大学人間安全保障研究センター非常勤研究員（2004-2006）、中部大学国際交流センター嘱託事務員（2006-2007）【学位】博士（国際学）（中部大学 2004）【専攻・専門】国際関係論

【主要業績】

[論文・分担執筆・共著など]

- 2006 「『人間の安全保障』の理解枠組みについての研究ノート」『ヒューマンセキュリティ・サイエンス』1: 78-89.
- 2004 「現代国際政治における『テロリズム』: 9.11 事件を手掛りとして」(博士論文) 中部大学大学院国際関係学研究科
- 2002 「グローバル化時代の国際テロリズムへの提言」財団法人公共政策調査会・警察大学校警察政策研究センター（編）『国際化の進展と社会の安全を考える』東京：立花書房, 5-22.

【2007 年度の活動報告】

出版業績

[書評]

- 2008 「書評 日本比較政治学会編『テロは政治をいかに変えたのか：比較政治学的考察』、『アーナ』(5): 467-69.

Ⅲ. 学外との連携事業

1. バンコク GLOCOL デスクの紹介

2007年11月1日、大阪大学バンコク教育研究センターの事務所に GLOCOL デスクが設置された。主なミッションは、GLOCOL 事業にかかる関係機関との協力関係の構築および GLOCOL 事業の周知である。

2007年度の主な事業として、JICA との連携事業である地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナーをタイで3月に開催し、その準備および各関係機関への連絡調整を行った。大阪大学の提携大学であるチュラロンコーン大学の政治学部 MAIDS (The Master of Arts in International Development Studies) に協力を仰ぎ、MAIDS のプログラム・ディレクターのチャンタナー・ワンゲオ准教授とともに、日程、講演者、研修訪問先を選定し、プログラムを決定した。

タイでの研修セミナーでは、「タイでの人間の安全保障問題」を研修生に学んでもらうという趣旨から、社会問題が集中しているタイ国南部アングマン海側のラノー県、パンガー県を訪問先として選定した。ミャンマーに国境を接しているラノー県には、移民労働者の問題、およびモーケンと呼ばれる漂流民や無国籍の人びとの問題がある。とりわけ、後者は、過去5年くらいで表面化してきた問題だ。歴史的な経緯が複雑で、ラノー県の行政にとっても大きな課題となっている。パンガー県では、2004年12月に発生したインドネシア・スマトラ島沖大規模地震および津波の被害が甚大であったカオラック地区を訪れ、その復興への地域社会、NGO の取り組みを肌で感じてもらった。

この2箇所での研修では、研修生に、市民社会、地域社会レベルでの取り組みと、行政レベルでの取り組みを理解してもらうように講演者、地域を選定し、それぞれの立場からの意見や活動を提示していただいた。

地域別研修「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー遂行にあたっては、日本とタイの政府機関や、NGO 諸団体と連絡を取り、GLOCOL の業務の広報に努め、今後のコラボレーションの可能性を打診した。

また、GLOCOL の業務の一環として、「大阪大学の海外拠点との連携」がある。2008年2月には大阪大学バンコク教育研究センターと協力し、日本留学フェアへのブース出展による留学生勧誘、大学紹介を行い、日本語・日本文化研究科を擁しているタイ国内提携大学から大阪大学への(交換)留学カリキュラムに対する要望を汲み取る会議などを開催した。タイ国側からの日本の大学への期待としては、卒業、修了後、すぐに社会で役に立つ実学、実践的な知への要望が、研究者養成よりも多い印象を受けた。

GLOCOL バンコク現地代表 石高真吾

バンコク GLOCOL デスクの住所、連絡先：

Global Collaboration Center, Osaka University
 C/O Bangkok Center for Education and Research, Osaka University
 Room C, 10th Floor, Serm-Mit Tower,
 159 Sukhmvit 21 Rd., Klongtoey-Nua, Wattana, Bangkok
 10110 Thailand
 Tel: +66-2-661-7584 Fax: +66-2-661-7585

2. 委託研究調査、委員会活動、学会役員、社会貢献など

GLOCOL スタッフは、各種の委託研究、委員会活動、学会役員などを務め、社会貢献を行っている。主なものは以下の通り。

独立行政法人科学技術振興機構委託研究 消費情報提供システム付加型節水・省エネソリューションの開発

文部科学省委託事業 世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業「人道支援に対する地域研究からの国際協力と評価：被災社会との共生を実現する復興・開発をめざして」データベース構築班リーダー

公益信託澁澤民族学振興基金・運営委員

独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所 調査研究懇談会・委員

財団法人とよなか国際交流協会・評議員

特定非営利活動法人開発と未来工房・理事

Habitat Japan 大阪アフィリエイト委員会・委員

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用委員会・共同研究プロジェクト外部審査員

地域研究コンソーシアム・運営委員

日本学術会議・連携会員

日本文化人類学会・理事、編集委員

日本アフリカ学会・理事

日本ナイル・エチオピア学会・副会長

日本華僑華人学会・理事、編集室長、選挙管理委員、研究大会大会委員長、企画委員

ヒューマンセキュリティ・サイエンス学会理事・副会長

東南アジア学会・大会委員

3. 他機関との連携

1) 人間の安全保障教育研究コンソーシアムへの参加

「人間の安全保障教育研究コンソーシアム」とは、人間の安全保障に関する教育および研究の交流促進を目的とした組織である。同コンソーシアムの発足は、2005年7月に中部大学春日井キャンパスで開催された「人間の安全保障・地球市民フォーラム」の分科会において、人間の安全保障を研究する研究機関・実践機関が集まり、ゆるやかな形の連合体を設立することはできないかと議論したことに遡る。その後、研究者の間でメーリングリストを用いて議論が重ねられた。そして、2007年9月に設立大会が開催され、正式に発足した。GLOCOLは、教育・研究の両面で人間の安全保障を重要なコンセプトの一つと位置づけており、設立当初から中心メンバーとしてコンソーシアムに参加している。

設立大会である人間の安全保障教育研究コンソーシアム2007年度研究大会は、2007年9月22日・23日の両日に、中部大学名古屋キャンパスで開催された。

第1日目は、「コンソーシアム設立のための話し合い」(参加表明機関のみ)、およびコンソーシアム設立大会があった。コンソーシアム設立大会にて、そのコンソーシアムの趣旨が明らかにされるとともに、参加団体が披露された。その後、若手研究者を中心とした研究発表大会が行われた。

第2日目は、午前中に記念シンポジウム「人間の安全保障のネットワークングのために」が開催された。パネリストは、武者小路公秀氏(大阪経済法科大学)、ノーマン・クック氏(名古屋大学)、チャンタナ・ワンゲオ氏(タイ・チュラロンコーン大学)であった。

第一回大会には、GLOCOLから小泉副学長、栗本センター長、峯副センター長、思特任助教、三田特任研究員、福田特任研究員の計6名が出席した。思特任助教は、研究発表大会で「東北アジアの環境問題と人間の安全保障」という演題で口頭発表を行い、大会の成功に大いに貢献した。また、GLOCOLの外国人招へい研究員として来日中であったフセイン・ソロモン准教授(ブレトリア大学)も参加した。

「コンソーシアム設立のための話し合い」は、参加を表明した機関のみが集まる会議であった。同会議では参加機関の代表者で設立趣旨文書を検討し、コンソーシアムの性格、今後の運営について討議を行った。この会議で、峯副センター長が2008年度の第2回大会は大阪大学で実施したいと発議を行った。発議に対し他の参加機関代表者からの異議はなく、承認された。2008年度大会は2008年9月20日・21日に大阪大学豊中キャンパスで開催される予定である。

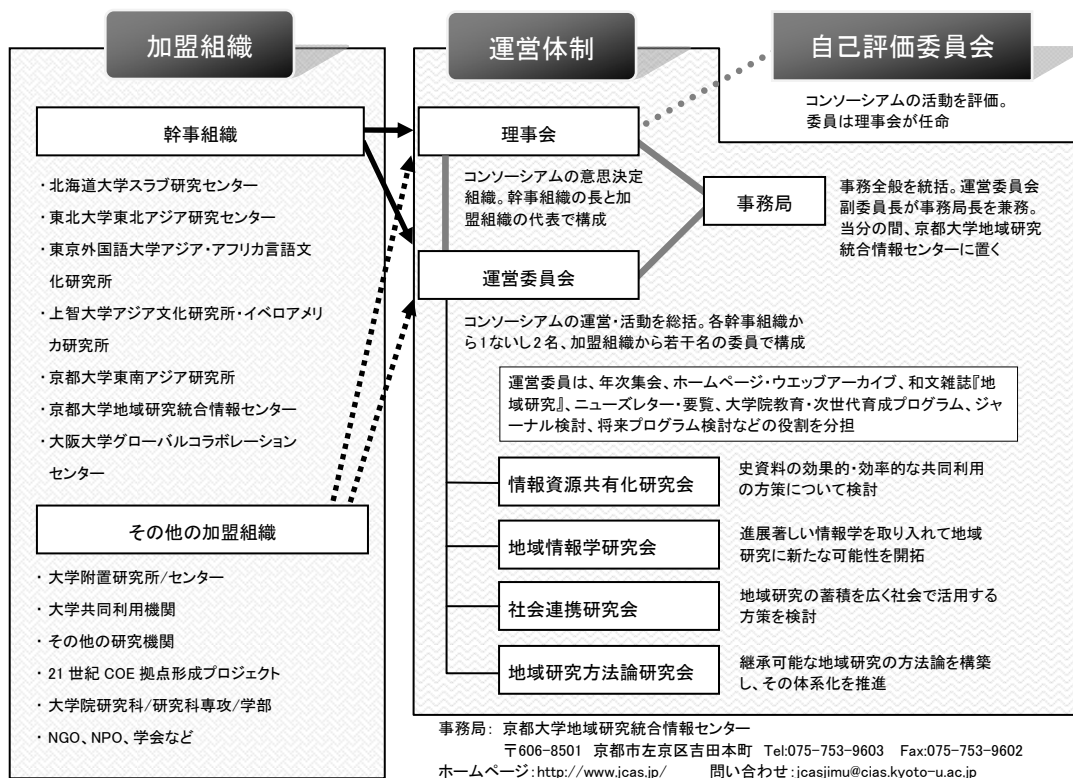
2) 地域研究コンソーシアムへ幹事組織として参加

2007年10月、GLOCOLは地域研究コンソーシアム（Japan Consortium of Area Studies, 以下JCASという）に幹事組織として参加することとなった。JCASには、地域研究にかかわる全国の教育研究組織、研究プロジェクト、学会、市民団体などおよそ80団体が加盟している。全国の主要な地域研究組織をほぼ網羅するネットワーク組織であり、地域研究の情報ハブとしての機能を果たしている。

JCASの運営は、GLOCOLを含む8つの幹事組織を中心とする運営委員会、理事会、事務局が行っている。2008年度より、GLOCOLセンター長が理事、2名のスタッフが運営委員を務めることが決まった。

JCASには、研究活動としての「情報資源共有化研究会」「地域情報学研究会」「社会連携研究会」「地域研究方法論研究会」に加えて、若手研究者を育成する「大学院教育・次世代支援プログラム」がある。和文雑誌やメールマガジンの発行により、加盟組織を通じたさまざまな研究情報が交換されている。JCASを通じて、GLOCOLが全国の地域研究組織と連携をし、研究を発展させる役割を果たすことが期待される。

運営体制：地域研究コンソーシアム(JCAS)の組織



3) シンポジウム・セミナーなどの開催

2007年度には合計19回のGLOCOLセミナーを開催したが(pp.12-27参照)うち5回を広島平和構築人材育成センター、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」、日本アフリカ学会関西支部、JICA大阪、ヒューライツ大阪、大阪大学大学院言語文化研究科通訳翻訳学専修コース、大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究機構(RISS)などと共催した。3月に開催された大規模な国際シンポジウムは、大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」との共催により実現した。

さらに、次の主催団体による会議などに協力し、積極的に参加した。

TV会議セミナー「紛争国における教育保障」

Video Conference : Last in Line, Last in School: Education in Countries Affected by Conflict

[講演者(所属・職)]

ラジェンドラ・ジョシ Rajendra Joshi

(世界銀行ネパール事務所教育担当上級専門官)

ゴピニ・パンデイ Gopini Pandey

(在ネパール セーブ・ザ・チルドレン・ノルウェー教育専門家)

レスリー・ウィルソン Leslie Wilson

(セーブ・ザ・チルドレン US 駐アフガニスタン代表)

[開催日・場所]

2007年6月29日、大阪大学中之島センター302号室

[言語:英語]

[概要]

紛争の影響を強く受けた国々での教育の重要性、現状と課題、グローバルな観点での政策課題について、国際教育支援に関わる国内外の専門家と意見交換を行った。テレビ会議はアフガニスタン、ネパール、世界銀行東京事務所、大阪大学中之島センターなどに設置されたテレビ会議システムを使い実施した。

[備考]

主催:社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、世界銀行情報センター(PIC東京)

日本文化人類学会 近畿地区研究懇談会「世界の人類学(2)」

[開催日・場所]

2007年7月7日、千里ライフサイエンスセンター903～905号室

[言語：日本語]

[プログラム]

司会：小泉潤二（GLOCOL）

米山リサ（カリフォルニア大サンディエゴ校）

「北米の人類学と文化研究：文化戦争の視点から」

田辺明生（京都大学人文科学研究所）

「サバルタン研究と人類学」

森 明子（国立民族学博物館）

「ドイツ民俗学と文化人類学」

大野あき子（オーストラリア国立大学大学院）

「<マルチカルチュラル>オーストラリアにおける人類学の動向：二大潮流としての
アボリジニ・メラネシア研究と近年の『ホーム』研究の攻勢をめぐって」

コーディネーター：竹沢尚一郎（国立民族学博物館）

[概要]

二年前に「世界の人類学(1)」を実施したが、今回は各国の人類学と隣接諸科学との関係に
焦点をあててパート2を開催した。人類学はどのように他の諸分野との差異化を図りなが
ら、自己の課題と理論をつくりだしているのだろうか。それにより、人類学が対社会・対
諸学問分野との関係で、何ができるのか、何ができないのかを議論した。

[備考]

共催：日本文化人類学会 / 国立民族学博物館研究戦略センター / GLOCOL

持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2007：国際開発協力

[講演者（所属・職）]

Partha DASGUPTA（英国 ケンブリッジ大学フランク・ラムゼイ記念経済学教授）

速水佑次郎（国際開発高等教育機構顧問）

Sakiko FUKUDA-PARR（米国 ニュースクール大学大学院教授）

堀井伸浩（九州大学経済学研究院准教授）

David HULME（英国 マンチェスター大学教授・慢性貧困研究所所長）

井谷 徹（国際労働機関（ILO）労働保護福祉局長）

桑島京子（国際協力機構（JICA）社会開発部第一グループグループ長）

目黒公郎（東京大学教授・生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センター長）

峯 陽一（GLOCOL 副センター長・准教授）

Antonio NAVARRA（イタリア ユーロ地中海気候変化センター所長）

岡部信彦（国立感染症研究所感染症情報センター長）

大塚啓二郎（国際開発高等教育機構 GRIPS/FASID 国際開発プログラムプログラムディレクター）

Sarfraz Khan QURESHI（パキスタン Innovative Development Strategies 社 CEO）

Kanit SANGSUBHAN（タイ 財務省財政政策研究所所長）

重富真一（JETRO アジア経済研究所地域研究センター主任研究員）

島田 弦（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）

山形辰史（JETRO アジア経済研究所開発研究センター開発戦略研究グループ長）

袁 鋼明（中国社会科学院経済研究所教授）

[開催日・場所]

2007年9月7日～8日、日本学会会議講堂

[言語：英語および日本語（同時通訳あり）]

[概要]

日本学会会議は「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議」を毎年開催している。今年の会議は国際開発協力を焦点をあてて9月7日と8日に東京で開催された。この会議の目的は、優れた研究者の参加を求めて問題点をとり上げ、科学の側からこの問題の解決策としてどのような貢献をできるかを検討し、今日の世界的な課題に対応する戦略や方法を見出すことである。

二名の高名な研究者 ケンブリッジ大学フランク・ラムゼイ記念経済学教授のサー・パーサ・ダスグプタおよび国際開発高等教育機構顧問の速水祐次郎教授 によって基調講演がなされた。このほか、国際開発協力に関わるさまざまな問題を議論するために、(1) 開発戦略と人間の安全保障、(2) 国際開発のための科学技術、(3) 能力構築とガバナンス、の3つのセッションが設けられた。これらの問題に取り組んでいる著名な専門家たちの参加を仰ぎ、現在の状況、現実問題に取り組んでえられた知識、現状を改善するための提案などについて討論した。

[備考]

主催：日本学会会議

共催：一橋大学 21世紀 COE プログラム 現代経済システムの規範的評価と社会的選択

GLOCOL は共同企画で1セッションを担当

International Development Studies Conference on "Mainstreaming Human Security"

[開催日・場所]

2007年10月4日～5日、タイ王国チュラロンコン大学

[言語：英語]

[プログラム]

2007年10月4日

Yoichi Mine, Global Collaboration Center, Osaka University

Toward an Open Networking of Human Security Education in Asia: The Inauguration of the Japan Consortium for Human Security Education and Research

Takashi Mita, Global Collaboration Center, Osaka University

Human Security and Capacity Development in Asia: A New Seminar

Prasong Kalayanatham, Faculty of Education, Chulalongkorn University

An Analysis of the Education Policy Formulation Process in the National Economic and Social Development Plan

2007年10月5日

Yoichi Mine

Round Table Reflections on the Panel Discussion By Panel Conveners

[概要]

人間の安全保障は、制度化された政策のなかのみで実現されるものではない。人間の安全保障やサステナビリティの実現には、フォーマルおよびインフォーマルな教育が大きな役割を果たす。アジアにおける教育施設のネットワーク化をいかに推進するかが話し合われた。

[備考]

GLOCOL はパートナーとして1セッションを担当

グローバル・マネジメント・フォーラム：境界なき場の創出

[開催日・場所]

2008年3月6日（JICA 大阪国際センター国際会議場（茨木市）） 7日（JICA 大阪国際
センター国際会議場（茨木市）） 8日（毎日インテシオ 4階大会議室（西梅田））

[言語：日本語]

[プログラム]

2008年3月6日

テーマ：環境をマネジメントする：境界を溶かす

飯島 博（NPO 法人アサザ基金代表）

「中心のないネットワークで世界を溶かす」

佐藤 哲（長野大学教授・生態学者）

「地域環境学のすすめ」

村田真一（NHK・チーフ・プロデューサー）

「里山（SATOYAMA）を世界に」

西岡良夫（ウータン・森と生活を考える会）

「熱帯雨林の違法伐採を止める」

菅野敦司（鼓童文化財団事務局長）

「太鼓が地域と地球をつなぐ」

千葉 泉（大阪大学人間科学研究科教授）

「南米の音楽・民族と文化の融合」

2008年3月7日

坂本 毅（元青年海外協力隊）

「内モンゴル緑化のための起業」

等々力政彦（民族音楽家・微生物学者）

「南シベリアと微生物に学ぶ共生」

テーマ：異文化とコミュニケーションする：身近な他者との対話

亀田尚己（同志社大学教授）

「小さな巨人シンガポールの底力」

赤木 攻（元大阪外国語大学学長）

「コミュニケーションギャップのその先」

王 向華（DixonWong 香港大学准教授）

「香港人の目から見た日系企業」

2008年3月8日

テーマ：多様性をマネジメントする：グローバリゼーションの実践

司会：浅田孝幸（グローバルマネジメントコース教授）

稲葉利彦（元天津伊勢丹総経理、㈱セレスポ副社長）

「中国人との間合い・天津伊勢丹の秘密」

青木俊一郎（元松下電器中国総経理、日中経済貿易センター理事長）

「松下グループの中国事業展開」

久島幸雄（双日プラネット(株)法務・リスク管理部長）

「海外進出の失敗事例：その原因と対応策」

ゲストコメンテーター：呉 松（中国大使館科学技術部一等書記官）

コーディネーター：小林敏男（グローバルマネジメントコース教授）

ディスカッサント：

高山正樹（グローバルマネジメントコース教授）

高橋伸光（グローバルマネジメントコース教授）

許 衛東（グローバルマネジメントコース准教授）

深尾葉子（グローバルマネジメントコース准教授）

[概要]

グローバル化が進む今日、異なる思考や文化をもつ他者や、これまで外部性として認識されてきた生態環境が、あらゆる市場行為や企業経営に直接関係を有する問題として、我々の前に立ち現れている。企業・組織・個人は、境界の内部で均質化した社会を前提にするのではなく、異なる文化・考えをもつ他者や、区切りようのない環境と共存し、それと協同して行動する必要に迫られている。そのような総合的な境界なきマネジメントを、日々実践している方々を交えて、21世紀をしなやかに生きるための戦略を、共に考え、実感する場を提供した。

[備考]

主催：大阪大学大学院経済学研究科 / 経済学部 OFC（オープン・ファカルティ・センター）

共催：大阪大学経済学部同窓会

協力：大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻 / GLOCOL / 中国大使館（科技部） / 大阪商工会議所 / 日中経済貿易センター / 大阪外国語大学中国語同窓会「鵬翼会」 / 東京大学東洋文化研究所

IV. 出版物、情報発信

1. リーフレット

GLOCOL の概要と研究活動を紹介するリーフレットを日本語と英語で作成し、社会的認知をえるための広報活動につとめている。



2. Website

GLOCOL はホームページを充実させている。トップページは次である。

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>

使いやすさを重視して大きなボタンを採用し、必要な情報にすぐに飛べるようになっている。ホームページ担当の事務補佐員の宮地薫子が、日常的な更新作業に従事している。GLOCOL の組織としての基本情報のほか、イベント情報、スタッフ情報などが満載されているので、多くの方々にアクセスしていただきたい。発足初年度である 2007 年度には、ホームページのコンテンツを考えるためのタスクフォースを立ちあげ、数名のスタッフが定期的に会議を行った。

2007 年度にはまた、将来的なケースライブラリー構築のための実験として、JICA 研修に関するホームページの構築に着手した。GLOCOL と JICA は、2007 年度から 3 年間にわたり、「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナーを開催しているが、このセミナーの趣旨やスケジュールに加えて、研修員が利用するテキストもまた、英和バイリンガルでホームページに掲載されている。研修員はどこの国にいても、インターネット環境さえあれば、予習と復習に GLOCOL ホームページを活用できるという仕組みである。

研修の記録もまた、豊富な写真資料をまじえて、同じホームページに掲載されている。さらに、「メンバー・オンリー」であるが、帰国後の研修生が意見を交換できる掲示板セクションもある。

GLOCOLは、これから構築していく教育プログラムにおいても、インターネット環境のメリットを十分に生かした教材づくりに取り組んでいく予定である。



日本語版トップページ
<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>



英語版トップページ
<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/en/>



JICA Seminar in 2007
<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/hscd/>

活動記録

- 2007.04.01 センター設立
- 2007.05.08 第1回センター会議
- 2007.05.14 GLOCOL セミナー(1)
"The Role of Evaluation in Understanding How Social and Educational Programs Work: Lessons from Recent Practice in Australia"
- 2007.05.16 第1回運営協議会
- 2007.05.21 第2回センター会議
- 2007.05.23 GLOCOL セミナー(2)
"Exhuming Development: Performance, Reality Talk, and Subaltern Agency in Contemporary India"
- 2007.05.30 GLOCOL セミナー(3)
"Globalization and Technology: Genetically Modified Crops"
- 2007.06.01 草郷孝好准教授、峯陽一准教授、三田貴特任研究員着任
- 2007.06.07 GLOCOL セミナー(4)
"Globalization and Human Insecurities in Africa"
- 2007.06.21 センター開所記念式典
- 2007.06.22 GLOCOL セミナー(5)
「シェイクスピアとアービトラージ：日本の金融市場における資本主義批判」
- 2007.06.25 第3回センター会議
- 2007.06.26 GLOCOL セミナー(6)
"The 'Iron Cage' of Globalization and Human Security"
- 2007.06.29 テレビ会議セミナー
「紛争国における教育保障」
- 2007.07.04 青年海外協力隊募集説明会
- 2007.07.07 日本文化人類学会 近畿地区研究懇談会
「世界の人類学会(2)」
- 2007.07.09 キックオフ・リトリート
- 2007.07.16 福田州平特任研究員着任
- 2007.07.17 GLOCOL セミナー(7)
「平和構築と人間の安全保障のための人材育成」
- 2007.07.18 第2回運営協議会
- 2007.07.23 第4回センター会議

- 2007.07.27 GLOCOL セミナー(8)
"Serialized Filipino Identity in Japan"
- 2007.08.03 GLOCOL セミナー(9)
"Time Use and Happiness in Bhutan"
- 2007.08.25 小泉潤二センター長、副学長に就任の為辞任
- 2007.08.25 辻毅一郎特任教授、理事に就任の為辞任
- 2007.08.26 栗本英世教授、センター長就任
- 2009.09.05 センター本部を吹田キャンパスウエストフロントに開設
- 2007.09.07-08 国際会議
「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2007」
- 2007.09.10 GLOCOL セミナー(10)
"Global Public Policy and The Millenium Development Goals (MDGs): A Short History of The World's Biggest Promise"
- 2007.09.18 第 5 回センター会議
- 2007.09.18 フセイン・ソロモン教授を招へい(10月20日まで)
- 2007.09.25 スタッフ研究会(1)
- 2007.10.01 津田守教授、宮本和久特任教授、住村欣範准教授、宮原 暁准教授、
上田晶子特任准教授着任
- 2007.10.01 GLOCOL セミナー(11)
"Conflict Prevention and Human Security in Africa: The Case of Darfur"
- 2007.10.04-05 国際会議
"The International Development Studies Conference Mainstreaming Human Security: The Asian Contribution"
- 2007.10.09 スタッフ研究会(2)
- 2007.10.11-30 JICA 地域別研修
「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー
- 2007.10.18 スタッフ研究会(3)
- 2007.10.19 青年海外協力隊募集説明会
- 2007.10.23 第 6 回センター会議
- 2007.10.23 GLOCOL セミナー(12)
"Post War Reconstruction in the Southern Sudan: Its Achievements and Obstacles, with a Special Reference to the Regional Perspective"
- 2007.10.30 GLOCOL セミナー(13)
"Children of Migrants from Burma"
- 2007.11.01 大阪大学バンコク教育研究センター内に GLOCOL デスクを設置
- 2007.11.01 ヴァージル・ホーキンス特任助教、石高真吾 GLOCOL バンコク現地代表着任

- 2007.11.12 スタッフ研究会(4)
- 2007.11.16 GLOCOL セミナー(14)
「国際的な人の移動をめぐる諸問題について」
- 2007.11.23 エンパワメント評価手法に関する導入研修会
- 2007.11.27 第7回センター会議
- 2007.12.15 文系研究戦略ワーキング「人間の安全保障：第3回ワークショップ」
「ポストコンフリクトにおける人間の安全保障」
- 2007.12.18 第8回センター会議
- 2007.12.19 第3回運営協議会
- 2007.12.21 スタッフ研究会(5)
- 2008.01.15 GLOCOL セミナー(15)
「台湾における通訳翻訳実務および大学・大学院における通訳翻訳教育と研究について」
- 2008.01.22 第9回センター会議
- 2008.01.23 スタッフ研究会(6)
- 2008.02.05 スタッフ研究会(7)
- 2008.02.15 GLOCOL セミナー(16)
「多様性、持続性：サステイナビリティ学教育の挑戦」
- 2008.02.18 第10回センター会議
- 2008.03.01-10 JICA 地域別研修
「持続的な人間の安全保障とキャパシティ・ディベロップメント」セミナー
タイフォローアップ研修
- 2008.03.06 GLOCOL セミナー(17)
「ルワンダの経験から学ぶ：紛争後の復興と発展」
- 2008.03.06-08 公開フォーラム
「グローバル・マネジメント・フォーラム：境界なき場の創出」
- 2008.03.09 GLOCOL セミナー(18)
「現代中国学の新たなプラットフォーム」
- 2008.03.12-14 国際会議
「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障」
- 2008.03.17 第11回センター会議
- 2008.03.21 GLOCOL セミナー(19)
「大学、民主主義と発展：ラテンアメリカからの展望」
- 2008.03.26 スタッフ研究会(8)
- 2008.03.24-04.25 JICA 地域別研修（法学研究科受け入れ）
「英語圏アフリカ地方行政改革プログラム」

年報 2007

発行日 2008年12月25日（非売品）
編集責任者 石井正子
編集事務 宮地薫子
編集発行 大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
TEL : 06-6879-4442 FAX : 06-6879-4444
<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>
印刷 株式会社 遊文舎



大阪大学グローバルコラボレーションセンター
GLOBAL COLLABORATION CENTER
OSAKA UNIVERSITY

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>